

339-2351

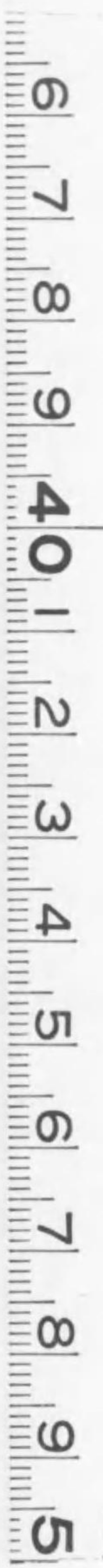


1200501396279

339

2351

評釋女大學



始



396



桐橋子述

評釋女大學

婦女界社版





生先子絢橋棚たれらべ迎を春新の壽百



百壽の春を迎へて

私は今年で丁度百歳になりました。昨年十一月十四日東京軍人會館において、愛國婦人會、國防婦人會等々十六の團體の御主催で、白壽のお祝をして頂きました。畏くも當日は東伏見宮大妃殿下の御台臨を仰ぎ、一入感激致して居ります次第であります。

かうして私が、百歳の長壽を保ち、明治の御維新から大正、昭和と、皇國の輝かしい發展を見させて戴きましたことは、ひとへに御稜威の然らしめるものと、ひたすら感激致して居ります。

昨年、支那事變が起りまして、正義日本の聖旗は北支・南支にはため

き、その旗風のもとに明朗な天地が建設されつゝあります。又國と國との關係を見ましても、日・獨・伊の三國の防共協定が固く結ばれ、滿洲國も伊國に承認されました。この日本の發展を見て心から感激しないものはありますまい。

併しながら皆様、日本のこの輝かしい發展をいやが上にも堅實なもの、ゆるぎなきものにするためには、私達國民は重大な覺悟を持たねばならないのであります。つまり上下一致、堅忍不拔の精神を以て非常時に臨まねばならないのであります。

明治天皇の御製に

國を思ふ道に二つはなかりけり 戦の場に立つも立たぬも

とあります。私達はこの御精神を奉體して、誠心誠意御奉公を致さねばなりません。さればこの秋に當り、私の百壽を迎へた記念と致しまして、『評釋女大學』を公けにすることになりました。

この『女大學』は、貝原益軒先生の著された女の寶典とも申すべきもので、昔は日本婦人として、必ず讀まねばならぬものであつて、嫁入時には、必ずこれを携へて行かねばならぬやうになつて居りました。ところが、明治以後、輕佻浮薄な外來思想に禍ひされて、一部の人々はかゝる婦人を時勢遅れのやうに言ふものもありましたが、これは甚だしい間違ひでありました。益軒先生は、よく婦人の本性を知つて、婦人の一生の教誡となされたものであります。只、多少今日とは、時勢が違ふため

に幾らか斟酌せねばならぬ所はありますが、それは駕籠を電車にする位
のことで、精神は少しも改むる必要はないばかりか、否、却つて今日非
常時日本の婦人が、益々熟讀玩味すべき教科書だと信じます。今日非常
時日本の婦人が、「女大學」のやうな心持ちであつたならば、現下の難局
を切り抜け、更に輝かしくも伸びゆく日本に一層の榮光を與へるものと
信じます。

本書は嘗て私が七十五歳の折、實業之日本社から刊行したものであり
ますが、永らく絶版になつてゐたものを、今回、婦女界社々長都河龍氏
の懇請によつて、新たに筆を加へて、全國婦人の皆様の前に贈ることに
なりました。

非常時日本の女性の皆様が、本書によつて一人でも多く、眞の日本婦人
の守るべき道を會得して下さつたなら、百歳の著者にとつて、これに優
る喜びはありません。尙卷末に加へました私の隨感録六篇は、私の希望
の一端を誌しましたもので、何等かの御参考にして下されば、此の上の
喜びはありません。

昭和十三年二月二日

棚橋 絢子

はしがき

今日の世の中は、何事にも新しきを追ふことのみが急であつて、古き事は兎角に忘れ去られんとして居ります。しかし古語にも、古きを温ねて新しきを知ると云ふ事がありますやうに、先づ古きを基礎として、その上に新しきことを築いて行くべきではあるまいかと思ひます。

然るに近頃の若き女子の中には、此の新しきを追ふ傾向の一層甚だしいのがあるやうに見受けられます。何も人形のやうにさう小さくなつて端から操られてばかり居るには及ばないとか。本來われらは男子の犠牲となるために造られたものではあるまいとか。一體男女は同権であるべ

き筈だとか。結婚によつて多くの拘束を受くるよりも、自由に活動の出来る獨身生活の方がよいとか。といふやうな種々さまざまの議論があるやうに承ります。聞いて見ますと何れにも一通りは尤もらしい所があるやうに思はれます。けれども、まだまだ私共には合點の行かない節が多いやうで御座います。

つまり斯様な議論の出ますのは、今日の新しき流行にのみ眩惑せられて、靜かに古きを温ねやうとすることを怠つて居るからでは御座いますまいか。昨年（大正元年）の九月十三日、即ち御大葬の當日、乃木將軍が見事なる殉死を遂げられ、同時にその夫人が潔く夫將軍に殉せられましたことが、いはゆる青天の霹靂となつて上下を震撼いたさせました。殊に

夫人に就いては、その自殺の可否は兎もあれ、その貞烈なる精神は、今日の女子が是非とも學ぶべき龜鑑であると評せられました。

斯くして俄に古き女子教育、中にも、その精神教育の價値が認められんとして來ましたのは、私共の大いに歡ぶ所でございます。さりながら人の尊も七十五日、喉元過ぐれば熱さを忘れるのが人情の常であります。乃木夫人の貞烈なる精神が學ばれようとして居る間は、果して何時までのことで御座いませうか。これを考へますと如何にも心細き次第ではないかと思ひます。そこで私はこれをよき機會として、古き女子教育の價値のあつた點を十分に認めて戴きたいといふ考から、身の不肖をも顧るに暇なく、曩には「女四書」の譯註を公にし、今又此の「女大學」の評

釋を試みた次第で御座います。

「女大學」は貝原益軒先生の著書といふことになつて居ります。或はその夫人の著であらうとか、又はその門人の作ではあるまいかといふやうな説も御座いますが、それは何れであらうとも、強ひて考證する必要は御座いません。兎に角昔の女子教育には、此の書が最も權威ある教科書となつて居たので御座います。然るに明治の御代となりましたから、福澤先生が此の書に對して最も手強き痛評を加へられました。以來、漸く此の書が疎んぜられるやうになり、既に今日となつては、殆どこれを顧る人のないまでになりましたのは、誠に遺憾なことであると思ひます。福澤先生があらゆる點に於て、我が文教の上に頗る大なる貢獻をいた

されましたことは、今更申すにも及ばないことで、誠に感謝に堪へない次第で御座います。が、たゞ此の「女大學評論」だけは餘りに極端な御議論であつたがために、遂に我が貞淑和順なる日本婦人を誤らすこととなり、時を経るに隨うて愈々益々此の傾向が甚だしくならうとしてゐるのは如何にも悲しむべき現象であると思ひます。

一體「女大學」は、その名の示すが如く女子の讀むべきものとして出來て居るので、男子方が女子を攻撃する場合の攻道具ではなく、女自身我が身を守る大切な守本尊なので御座います。若しこれが或一説として傳へられて居りますやうに、益軒先生の夫人の著であると致しましたならば、男子方からとしては、少しの異論をも挾まるべき性質のもので

はあるまいと思ひます。で私はたとひ實際は益軒先生の著であると致しましたも、本來女子の手に成るべき性質のものを、先生が代筆せられたまでに過ぎないものであらうと解釋いたしたので御座います。斯ういふ風に考へて見ますと、福澤先生の申さるゝやうな不都合な點は少しも御座いません。たゞ昔と今日と特に時勢の異つて居る點に關しては、固より多少の斟酌を要しますけれども、先づ大體に於いてはあの儘で別段大した差支は御座いますまい。否寧ろもう一層嚴重であつてもよろしいかと思はれる位で、自ら守る教訓としては、寛に流るゝよりも嚴に過ぎた方をこそ望むべきであらうと思ひます。

要するに私は此の立場からして、われわれ女子の身にとりては最も權

威ある「女大學」の上に、不束なる評釋の筆を加へた次第で御座います。
讀む人希くはその心して御覽下さいませ。

大正二年六月

七十五歳の媪 絢子しるす

評釋 女 大 學・目 次

- 一 女の子の教育法……………一
- 二 形之美より心の美……………七
- 三 男女の別を正しくせよ……………一三
- 四 夫の家と七去の實例……………一九
- 五 孝道の大切なこと……………三二
- 六 夫を主人と思へ……………三六
- 七 舅姑と小姑等への心得……………四六

| | | |
|----|-----------------|----|
| 八 | 嫉妬の心を戒めよ…………… | 四八 |
| 九 | 言語を慎しむこと…………… | 五二 |
| 十 | 家事に精を出すこと…………… | 五四 |
| 十一 | 迷信に動かされるな…………… | 五八 |
| 十二 | 萬事儉約を旨とせよ…………… | 六一 |
| 十三 | 男女の隔てを固くせよ…………… | 六三 |
| 十四 | 華美に流れるな…………… | 六五 |
| 十五 | 婚家と實家の輕重心得…………… | 六九 |
| 十六 | 實家の自慢嚴禁のこと…………… | 七三 |

| | | |
|----|------------------|----|
| 十七 | 徒手坐食を戒しむ…………… | 七八 |
| 十八 | 女中の使ひ方…………… | 八二 |
| 十九 | 女子には五つの惡疾あり…………… | 八八 |

附 録・隨 感 錄

| | |
|--------------------|-----|
| □私の長壽の秘訣四ヶ條…………… | 一〇一 |
| □廢物利用と冗費節約…………… | 一〇九 |
| □容色の美醜よりも誠の心で…………… | 一一四 |
| □私の望みたいこと…………… | 一二〇 |

□死をいとはぬ孝心を持って……………一二五

□孝は百行の基……………一三二

評釋女大學・目次（終）

評釋女大學

棚橋 絢子



夫女子は、成長して他人のうちへ行き、舅姑に仕ふるものなれば、男子よりも、親の教ゆるがせにすべからず。父母寵愛して恣に育てぬれば、夫の家に行きて必ず氣隨にて夫に疎まれ、又は舅の誨正しければ、堪へがたく思ひ、舅を恨み誹り、中惡しくなりて、終

には追出され、耻をさらす。女子の父母わが訓なきことを謂はずして、舅夫の悪しきとのみ思ふは誤なり。これ皆女子の親の教なき故なり。

何事にも多少の例外は免れぬものゆゑ、すべての女子が悉く他家へ行くものとは限りませぬけれども、我が國の普通の習慣としては、或特別の事情のない限り、女子は他家へ嫁ぎて、夫及び舅姑に仕へなければならぬものといふことになつて居ります。で他日お嫁入をした時に耻をかくことのないやうにといふ所から、これに對する親の教は、男の子に對してよりも一層篤く注意しなければなりません。

されば、若し此の注意を怠つて、たゞ蝶よ花よと寵愛するばかりで、その子の後のためを考へずに、氣隨氣儘な育て方を致しましたならば、他日良縁を求めて夫の家に行きました時に、夫からは我が儘者として嫌はれるやうになり、嚴格な舅姑には迎も仕へることが出来ないといふやうな始末になり、はては、正しき道理を以て自分の足らぬ所を補つて呉られる舅姑を、却つて悪しざまに言ひなして、夫婦の中は兎も角、先づ舅姑との折合が悪くなり、終には離縁沙汰となつて、世間到大耻をさらすやうなこともなります。

然るに我が子の愛に溺れて居る親は、何處までも我が子の言ふことを信じて、その心得違ひをして居ることに氣附かず、又自分達の教

育の仕方が誤つて居たことをも思はず、一概に先方の舅姑や夫だけが悪い者のやうに思ふのは、實に以ての外のことだといふべきではありませんまいか。

昔、唐の代宗の時、郭子儀といふお大名がありました。忠節勳功世に並びなき方でありましたので、帝はその皇女昇平公主と申す方を、郭子儀が子の郭曖に給はりました。ところが夫婦の中合が餘り面白くなかつたものと見え、或時物争ひをして、爾は父が天子であることを頼みにして、斯様な我が儘な振舞をするのであらうけれども、我が父こそはその武勇世にも比ひなきもので、天子の位などは別に何とも思つて居ないぞと申しましたさうです。

公主はこれ聞いて大に怒り、左様ならば私の方にも思案が御座いますといふので、直ちに車の用意をさせて、大急ぎで御殿に参り、つぶさに此の事を父君に奏聞せられました。

郭子儀は此の事を聞いて大に驚き、これは由々しき一大事を出来したものだと思ひまして、先づその子郭曖を呼んで、その不心得の點を戒めて置き、さて自ら参内して、如何なる處分を受くることかと靜かにその罪を待つて居りました。然るに帝は公主の訟をお聞き入れにならなかつた御様子で、郭子儀を近くお召になり、「心にぶらず、耳つぶれねば、人の子の親とはなられぬものぞといふことがある。自分に於ては女童の聞の内なる言葉の末などを聞き入れるやうなものではない

ぞ」と仰せられて、少しもその事をお咎めにならなかつたばかりでなく却つて郭子儀をお慰めになつたといふことで御座います。實に人の子の親たる者は、斯くこそあらまほしきものと思ひます。

昔と變つて今日は、男女ともに學校に上つて、それぞれに教育を受けることが出来る、そこで、教育のことは學校に任せて置きさへすればそれで十分である、若し間違ひが出来れば、それは學校の罪であるといふやうに考へて居る人もあるさうで御座いますが、これは大變な心得違ひであらうと思ひます。

男の子の教育は、多少趣きの變つた點も御座いませうが、女の子の教育、特にその精神教育の方面に就いては、逆も學校ばかりでは行き

届かぬ所が多く御座いますゆゑ、これは是非とも家庭に於て、十分に責任を以て教育して貰はねばなりません。斯くてこそ學校に於ける教育も、初めてその效を奏し得るので、若し此の家庭に於ける精神教育の方面が誤つて居りましたならば、學校の教育は啻にその效を奏さないばかりでなく、或は却つてこれを悪用せられるやうな虞れがないとも限りません。

二、女は容よりも、心のまされるをよしとすべし。心緒美なき女は心騒がしく、眼恐しく見出して人を怒り、言葉あららかに物いひさがなく、口誓きて人に先だち、

人を恨み嫉み、我が身に誇り、人を誇り、笑ひ、我人に勝りがほなるは、皆女の道にたがへるなり。女はただ和ぎしたがひて、貞信に情ふかく静なるをよしとす。

諺にも女は氏なくして玉の輿に乗ると申しまして、中には美貌一つで思ひがけない出世をする者も御座いますが、これに伴ふだけの才もなく、又徳もなき者の斯かる出世が、果してその者の終生の幸運であらうか何うかといふことは、甚だ疑はしいと思ひます。

世には美貌のために一身を誤つて終生を悔恨の涙に暮らす者が少くありません。美人薄命多しと申しますが、實際さうあるべきことで、

容貌の美は、たとひ如何程の美でありましても、何時までかこれを持ち続けることが出来ませう。才はこれを用ひていよいよ其の力を表すことが出来ます。徳はこれを磨いてますます其の光を添へることが出来ます。けれども容貌の美ばかりは、寄る年波と共に次第に衰へ果つるが世間の常ではありませんか。

されば斯かる衰へ易い容貌の美を頼まんよりは、磨いて磨き甲斐のある心の美をこそ望むべきであらうと思ひます。固より女子は身だしなみの大切なるものゆゑ、天性の美醜如何に拘らず、一通りは容儀を整へることに注意致さなければなりませんけれども、これがために最も肝腎な一心の修養を怠るやうなことがあつてはなりません。

古語に、一忍以て百勇を支ふべく、一靜以て百動を制すべし。と云ふことがあります。誠に味ひのある語であります。よく忍ぶものは如何なる艱難にも堪へることが出来、よく靜かなるものは、如何に烈しい活動の中にあつても、惶てず、騒がず、平然として其の身を持つることが出来ます。心を靜かに落ち付けて、總てを忍びつゝ、物事を處理して行きましたならば、心に思ふことも、目に見ることも、口に言ふことも、身に行ふことも、悉く女の道にかなうて、貞淑和順の美德を完うすることが出来るであらうと思ひます。

或處に、極めて神經過敏で、氣短な奥さんが居られました。一寸したことからでも御機嫌を損ずるやうなことがあると、さあ大變、俄に

哮り立つて、誰れ彼れの容赦なく當り散らすといふ始末で、恐しい權幕をして、主人にも喰つてかゝれば、書生や女中などは、頭から叱り飛ばす、簞笥の抽出はガタビシいはせる、障子や襖の開閉は烈しくなる、まるで阿修羅王の狂ひまはるやうな有様となつて、何とも手の附けやうがない、けれども主人は餘程忍耐深い方と見えて、出来るだけ奥さんの鋭い鋒先を避けるやうにして居られるので、兎も角も無事に納まつて居るやうなものゝ、若し之が奥さん同様に氣短で、哮り立てられたならば、それこそ龍虎相争ふが如き大騒ぎとなるであらうし、若し又、此の主人が、所謂怒を他に移すといふやうな方であつたならば、お勤先の下役の人達は、屢々その御相伴を蒙つて、餘計なお目玉

を戴くやうなことにもなり、延いてはその下役の人達の家庭に迄飛んだ影響を及ぼす事であらうと思はるゝ位であります。其の事のなくてすんでゆくのは、先づ先づ結構な次第であるといふお話を聞いたことがありました。

そこで此の奥さんの烈しく狂ひ廻られるのを、假りに一つの勇氣であるとして見ますならば、前に引いた古語「一忍以て百勇を支ふべく、一静以て百動を制すべし」を反對にして、一勇以て百忍を毀つべく、一動以て百静を破るべしとでも申すべきであらうと思ひます。それゆゑ前に申したやうに、極めて大切なる働きを致します所の、一忍と一静とを以て、一心の美を保つやうに致したいもので御座います。

三、女子は稚き時より、男女の別を正しくして、假初にも戯れたることを、見聞かしむべからず、古の禮に男女は席を同じくせず、衣裳をも同じ處に置かず、おなじ所にて浴せず、物を請取り渡すことも、手より手へ直にせず、夜行く時は必ず燭をともして行くべし。他人はいふに及ばず、夫婦兄弟にても別を正しくすべしとなり。今時の民家はこのやうの法を知らずして、行規を亂にして名を穢し、親兄弟に辱をあたへ、一生身を徒にするものなり。口惜しき事にあらずや。女は

父母の命と媒妁とにあらざれば交らず親しまずと小學にも見えたり。假令命を失ふとも心を金石の如くに堅くして、義を守るべし。

此の頃は萬事舶來流行の世の中で、男女交際といふことに就いても種々の議論があるやうで御座いますが、私は今日の我が國の状態では西洋全移しの男女交際は餘程危険なことで有らうと思はれます。さうでなくてさへ間違の生じ易い若き男女に、自由に交際させる——よしんば相當の監督者があるとしても——といふことにいたしましたならば、その交際の機會が因縁となつて、遂には知らず識らずの間に善良な

る男女の風儀を亂すやうな事になりはしないであらうかと思ひます。

此の點に就いては矢張り昔からの東洋流で、男女の別を正しくした方が最も安全であらうと思ひます。固より極端に隔離するには及びませんが、李下の冠、瓜田の履は、成べく避ける方が無難であらうと思ひます。一例を申せば、電車や汽車の中でも、止むを得ない場合の外は、男子（特に年頃の男子）の隣席に座を占めないこと。次に男女混浴といふやうなことは、今日では如何なる田舎の温泉場でも、其の例のないことでありませうけれども、海水浴場などでは、随分男女が入り亂れて游泳するやうなことがあり、従つて衣服なども、同じ場所に脱ぎ捨て、置くといふやうなこともあり勝ちでありますゆゑ、これら

のことは是非とも避けること。それから雑誌小説の類を、手から手に受授したが爲に、遂に誘惑の毒手にかゝつたと云ふやうな例もあります。之も出来るだけ避けること。又夜の外出は、たとひ燭があり、同行者があつたとしても、餘り望ましいものではありません。これ亦成べく遠慮すること等で御座います。

今一つ夫婦の別といふことも、昔からやかましく申してあることで、是非とも正すべき事で御座います。殊に今日の新家庭を持つた若い御夫婦の間には、此の大事な「夫婦別あり」といふ禮儀の守られて居ないが爲に、甚だ殺風景極まるものとなつて居るのがあるといふことで御座います。一層の御注意ありたきものと思ひます。そして兄弟

間の別は、以上に述べましたものに準じて之を正せば宜しからうと思ひます。

さて一口に民家とは申しますものゝ、主としては地方の中流以下の民家なので御座いますが、これは今日に於ても猶且つ風儀の頹廢して居るのがあつて、容易に其の廓清を計ることは出来難いやうで御座います。そして何うかすると其の影響が中流階級の者にまでも及ばんとして居ります。如何にもして之を防ぎ止めて以て女子の生命とすべき貞操の徳を完うしなければなりません。

こゝにも戒しめてありますやうに、父母の命と媒妁とのない限りはたとひ如何なる事情がありましたも、私に男女の交りを結ぶとか親密

を計るとかいふやうな事のないやうに致さなければなりません。なほ場合によりては、死をだも辭せざるの覺悟を以て、一身の純潔を守らねばなりません。なぜかと申せば、死は一時のことでありますが、義は永久のことであるからで御座います。

世には其の汚名を新聞雑誌の上に謳はれて、徒らに生耻をさらして居る人が少くないやうで御座いますが、斯くしても此の世に生存せんとするのは、所謂生を貪るものであつて、何等の意義もなきものと云ふべきでは御座いますまいか。されば斯かる意義なきものとなつて百年の長壽を保たんよりは、たとへ妙齡にして墳墓に赴くとも、意義ある生涯をして此の世の終りを告げたいでは御座いませんか。

四、婦人は夫の家を我家とする故に、唐土には嫁を歸るといふ。我が家に歸ると云ふことなり。たとひ夫の家貧賤なりとも、夫を怨むべからず。天より我に與へ給へる家の貧は我が仕合の悪しき故なりと思ひ、一度嫁しては其の家を出でざるを女の道とすること、古聖人の訓也。もし女の道に叛き、去らるゝ時は、一生の耻なり。されば婦人に七去とて悪しき事七つあり、一には舅姑に順はざる女は去るべし。二には子なき女は

去るべし。これ妻を娶るは子孫相續のためなればなり。
しかれども婦人の心正しく行儀よくして、妬む心なく
ば去らずとも同姓の子を養ふべし。或は妾に子あらば
妻に子なくとも去るに及ばず。三には淫亂なれば去る。
四には悋氣深ければ去る。五には癩病などの悪しき疾
あれば去る。六には多言にて慎みなく、物いひ過すは
親類とも中悪くなり、家みだるゝものなれば去るべし。
七には物をぬすむ心あるは去る。此の七去は、皆聖人
の教なり。女は一度嫁して、其の家を出されては、假

令再び富貴なる夫に嫁すとも、女の道にたがひて大なる辱なり。

昔から女子は本来我が家といふものがなく、夫の家を以て假りに我が家とするものであるといふことになつて居り、佛教などでは、「女人は三界に家なし」とまでいつて御座います。けれども私は女子と雖も決して我が家のないといふ譯のものではなく、夫の家を以て假りの我が家でなく、眞實の我が家であるといふことに致したいと思ひます。然るに世の中には、此の假りの我が家といふ思想に誤られて居る婦人が尠くないやうです。殊に今日は其の傾向が一層甚だしいやうに見受

けられます。最も甚だしいのは終生の苦樂を共にすべき、天上天下唯一人の夫さへも、眞實の夫でなく、假りの夫であるかの如くに考へて居るやうな者もあるといふ事で御座います。「何も此處ばかりに太陽が照るといふ譯ではあるまい」とか、「貴方だけが男ではない」とか、「嫌になつたらさつさと出て行きますよ」とか、といふやうな聞くに堪へない不人情極まることを、一向平氣で口に出し、又は心に思ふのでさへも甚だ淺間しいことだと思はれますのに、啻に之を口にし、心に思ふばかりでなく、實際に其の通りを行つて居るのが尠くないといふに至つては、實に驚き入つた次第では御座いませんか。

之に反して「此の家が眞實の我が家である。此の家に來たのではな

い、歸つたのである。たとひ如何なることに會ふとも、決して此の家は出ない。又出るやうな事があつてはならない」といふ女の道を守る堅固なる覺悟がありましたならば、如何なる苦痛と雖も忍んで之に堪へることが出来ませう。況んや些々たる貧賤の如きは敢て意とするの要なきもので御座います。自分の事を例に引くのは如何かと思ひますが、丁度此のところに當て候まるやうなお恥かしき經驗が御座いますので、其の時の私の感想を申して見ませう。

私共が最も貧困を極めた時のことで御座いました。里の親の方では見るに見兼ねたものと見えて、随分困窮して居るやうだが、それ程の困難には迎も堪へられないであらうから、此の際思ひ切つて歸つて來

ては何うであらう。再嫁さへせねばよいではないかと言つて、それはそれは親切に申して呉れられました。

私は此の眞實の溢れた親の言葉を聞いて、涙を流して喜びました。曩には私を勵まして、たとひ如何なることがあらうとも、決して此の家に戻つて来てはならんぞと、いとも嚴に言つて聞かせて呉れられた親が、今日斯く迄困窮する有様を見るにつけて、嘗ての訓戒も打ち忘れて、歸つて来ててもよいと言つて呉れられたことは、何といふ親切な事であらうぞと嬉しくもあり、又悲しくもあつて、泣かない譯には行きませんでした。

併し私は此の際親の慈愛に甘へて里に歸らうなど、言ふ心は微塵も

ありませんでした。『天將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞し、其の體膚を餓ゑしめ、其の身を空乏にし云々』といふ孟子の語を思ひ出して、何も私如き者に大任を降される譯ではありませんまいけれども、何か世の中に私にでも出来るやうな相當の役目があつて、其の爲に斯かる困窮を與へられたのかも知れない。果して然うであるならば、こゝが一番奮勵努力すべき時であらう、若し又然うでなくて、斯かる困窮がいつまでも續くやうな運命となつて居るのならば、たとひこゝで一時を免れた所で、他に又更に此の續きの困窮を受けなければならぬであらう、して見れば何れにしても免れることの出来ない困窮なのである。何うせ同じ事ならば、此の家

で辛抱した方が、辛抱のし甲斐がある、殊に餘儀なき事情あつての貧困は何も恥づるには及ばない、唯女徳に疵のつくやうな事でもあれば眞に恥づべき事で、再び取返しのかね事である、されば最も大切な女徳をさへ完うして行くことが出来れば、如何なる苦痛にも窮迫にも打ち勝つて行けないことはないであらう、『憂きことのなほ此の上に積れかし限りある身の力ためさん』までのことであると思ひまして、遂に其の辛抱をしとげた次第で御座います。

次に婦人の七去といふ事に就いては、福澤先生の御攻撃があつて以來「女大學」の非難を受くる中心となつて居るやうで御座いますが、之も解釋の致し方次第で、どちらにも申されるであらうと思ひます。

之が若し福澤先生の御考へになるやうに、男子方から婦人に對しての責道具であると致しますれば、婦人に取りては如何にも苦痛なる箇條でありませうけれども、之を持つて婦人自身の守るべき健氣なる覺悟であるとし、又は親として女の子を育てる場合の心得としますならば、何等の不都合をも感じない譯では御座いますまいか。

第一、「舅姑に順はざる女は去るべし。」舅姑に順はざれば去られるといふのは實に當然の事であらうと思ひます。家族制度の重んぜられる我が國では、偏に舅姑の命を奉じて其の家風を守ると云ふのが最も大切なことで御座います。斯くしてこそ夫をして其の功をなさしむる所の眞の内助者たることを得るので御座います。但し此の順ふといふ事

は、何も奴隸的に屈從するといふのではなく、本來従ふべき筈のものに快く服従することなので御座います。

第二、「子なき女は去るべし。」子を産むのみが女子の唯一の役目であるとは限りませんが、子孫繁昌して、以て祖先の祭を断たないやうにするといふ家族制度の習慣から申せば、子なき女の去られるといふのは、一應尤もの點があるやうに思はれます。それに女子は子供の時から健康に注意して、健全なる發育を遂げ、以て衛生と節制とを重んじましたならば、子供の出来る方が普通なのでありますゆゑ、此の點に就いて多少の責任を感じない譯には参りません。

とは申しましても、女子の健康さへ十分であれば、必ず子供が出来

るものとは限りませんから、子供が出来ないといふだけの理由で、直に離縁するといふことは如何にも酷な話であらうと思ひます。そこでよくよく子供の出来ないといふやうな場合には、同姓の子を養子としてもよいと云ふ特例が設けてあるのでありませう。で、之は家族制度の上からと、今一つには、女子の健康を重んずるといふ點から、最も強く説いたものであると見れば、よろしからうと思ひます。但し最後の妾といふことは、昔は公然許されて居つたもので御座いますけれど、今日の進んだ道徳から見ましては、此の事だけは是非とも取除きに致したいもので御座います。

第三、「淫亂なれば去る。」之は貞操を重んずべき女子の最も慎し

ければならぬ事で御座います。

第四、「格氣深ければ去る。」之は程度の如何にもよること御座います。烈しいのになりますと、殆ど狂氣に近いのが御座います。大に慎まなくてはなりません。

第五、「癩病などの悪しき疾あれば去る。」悪疾の病氣といふことは、如何にも同情にたへませんけれども、一家の血統を重んずる上からは、實に己むを得ない次第で御座います。で斯様な悪疾の遺傳を受けて來て居る者は、最初から結婚をしないのが最も無難であらうと思ひます。

第六、「多言にて慎みなく、物いひ過すは親類とも中惡くなり、家みだるゝものなれば去るべし。」多言といふことも、固より程度の如何によ

ること御座いますが、之がために親戚知友の間に不和を生じたり、家庭内に風波を起したり、種々の弊害を醸すもので御座います。ゆゑ、世の女子たるものは、之も亦離婚の一條件となるものといふ考を以て、常に戒心致さなければなりません。

第七、「物をぬすむ心あるは去る。」昔から「貧の盜」といふことを申しますが、今日では必ずしも貧とばかりには限らないと見えて、良家の令嬢方の中にも、稀には萬引といふやうなことをなさる方があるといふことです。これらは固より貧の盜といふのではなくて、所謂「虚榮の盜」とも云ふべきもので御座います。何れにしても既に盜むといふ罪名を帯ぶるやうになりました。離婚の一條件として數へ上げら

れても致し方のないこととなります。されば當人は固より之が父母たる者も大に注意して、斯かる汚名を受けることのないやうに致したいもので御座います。

五、女子は我が家にありては、我が父母に専ら孝を行ふ理なり。されども夫の家に行きては、専ら舅姑を我が親よりも重んじて、厚く愛しみ敬ひ孝行を盡すべし。親の方を重んじ、舅の方を輕んずることなかれ。舅姑の方の朝夕の見舞を闕くべからず。舅姑の方の勤むべき業を怠るべからず。若し舅姑の命あらば、慎み行ひ

て背くべからず。萬のこと舅姑に問ひて其の教に任すべし。舅姑若し我を憎み誹りたまふとも、怒り恨むことなかれ。孝を盡し誠を以て仕ふれば、後は必ず中よくなるものなり。

女子は成長したる後には他家へ嫁ぐことゝなりますので、實の父母に對して孝養を盡す期間は極めて短いもので御座います。それゆゑ最も意を用ひて孝養を盡さなければなりません。それに他日舅姑に仕へる場合の實地の稽古ともなるので御座いますから、其の邊の心掛けからしても、決して之を怠つてはなりません。

さて夫の家に行きましたならば、夫の家は即ち我が家となり、夫の父母は即ち我が父母となりますので、嘗て父母に仕へた時よりも一層注意して、これに仕へなければなりません。例へて申せば、前の孝養は一種の豫行演習で、今度こそは退引ならぬ實地の戦争のやうなものであるといふ覺悟を以て、身命を捧げて、誠心から孝養を盡すので御座います。斯かる誠心と共に、實の父母に對すると同様の親愛と敬慕とを以て舅姑に仕へましたならば、昔から犬猿音ならざるものとされて居る舅姑と嫁との間柄も、必ず圓滿に和合し得られるであらうと思ひます。

然るに若し之に反して鋭い猜疑心を以て互に缺點の穿り合ひを始めましたならば、所謂疑心暗鬼を生じて、それからそれへと不安の念に驅られるやうになり、雨か、風か、愈々雲行は悪くなるばかりで御座います。それ故に舅姑に親しむ秘訣ともいふべきものを申しますと、唯無邪氣に隔てなく仕へるといふことに過ぎないので御座います。又此の頃は妙なことが流行りますさうで、舅姑と別居することを條件として、なくては婚約が整ひ兼ねるといふことで御座いますが、世にもこれほど不心得極まる話は多くあるまいと思ひます。一體舅姑に孝養を盡すといふことを、何か非常に苦痛なことで、もあるかのやうに思ふのが抑々の間違ひです。孝行といふことは何もそのやうに苦痛なものでないばかりではなく、世にも是程樂しみなものはない筈で御

座います。他人に對しての一寸した親切でさへも、其の人の喜ぶ顔を見るのは誠に樂しみなもので御座いますのに、況んや誠心よりして喜んで呉れられる舅姑の顔を眺めつゝ、心からなる孝養を盡すといふことが、何うして樂しまずに居られませう。さう云ふ筈がないでは御座いませんか。

六、婦人は別に主君なし。夫を主人と思ひ慎みて事ふべし。輕しめ侮るべからず。惣じて婦人の道は人に從ふにあり。夫に對するに、顔色言葉つかひ慇懃に謙り、和順なるべし。不忍にして不順なるべからず。驕りて

無禮なるべからず。これ女子第一の勤なり。夫の教訓あらば其の仰を叛くべからず。疑はしき事は夫に問うて其の下知に従ふべし。夫問うことあらば正しく答ふべし。其の返答疎かなるは無禮なり。夫若し腹たて怒るときは恐れて順ふべし。怒り諍ひて其の心に逆ふべからず。女は夫を以て天とす。返すぐも夫に逆ひて天の罰を受くべからず。

今日の如く、女權といふことがやかましく言ひ囃されるやうになり、女子の參政權運動さへも盛んになつて居る時節柄から申しますならば

婦人だからと申して、何も主君がない譯のものでは御座いますまい。又今日では婦人の職業といふことも、次第に其の道が開けて参りました。此の點から、女子の獨立といふ聲も聞かれるやうになりました。此の點からも強ちに主人のないものとする譯には参りませんでせう。

併し女子の本來から申しますと、男子と併行して政治運動を試みるとか、又は獨立して職業に従事するとかいふことは、決して喜ぶべきことではなくて言はゞ常道を逸した所の一つの變道ともいふべきものであらうかと思ひます。従つて男子方が國家の表面に立つて花々しき活動を試みられるのと同様の意味では、女子の主人に當るべきものはないといふことになります。男子が其のつかはるゝ所の人を主人とす

れば、婦人も其の恩恵ある夫を主人とするは當然の事であらうと思はれます。そこで自分の夫を天にも地にも唯一人の主人といふべき方であると思ひ得て、之に誠心をこめて慎んで事へなければならぬといふ教を立てられたのであらうと思ひます。

既に夫を主君であるとして之に事へるといふことになつて居る以上は、決して之を侮り輕しめるやうなことがあつてはなりません。然るに近頃は女子の教育が進んで、女ながらも一角の高等教育を受けた者が多くなりました。それ故か、動もすれば之を誇る餘りに、却つて主人を輕蔑するといふやうな聞えが往々あるといふことを耳に致しますが、それでは折角受けた教育が何の役にも立たないばかりでなく、却

つて害をなすといふものではありません。假りにも高等教育を受けた程の者であるならば、愈々益々身を慎み、行を正しくして貞淑に従順に、夫に事へなければならぬ筈のものであらうと思ひます。

改めて申すまでもなく、女子には従順といふことが最も大切な徳の一つとなつて居ります。昔から女子には「三従」といふことをやかましく申したもので御座います。實際女子は、此の従順といふ徳を全うしてこそ初めて女子の女子たる所以のものを發揮することが出来るのであらうと思ひます。尤も、此の従順といふことは、彼の所謂屈従とか、盲従とかいふのとは大に趣きを異にして、何も従ふべき道理のないことにまでも、強ひて従はねばならぬ筈のものでは御座いませぬゆ

ゑ、その點だけは十分に區別して考へて置かねばなりません。

今日の若い人達の淺墓な考へから推察すると、昔の女は夫の命とあれば、一も二もなく、屈従もし盲従もして居たかのやうに思はれるでありませんが、その實は決してそんな譯のものではありませんでした。固より和順を旨として居りますので、顔色言葉づかひ共に注意して飽までも夫の意に背かぬやうにしては居りますけれども、さあ此の事ばかりは何うしても従つてはならぬといふやうな事柄の起つて來た場合には、それはもう十分に自分の所存を述べて、確に道理に背いて居ると思はれるときは、夫の意を翻へさせるやうに努めたもので御座いました。

次に夫に對する心得として、『顔色言葉づかひ慇懃に謙り、和順なるべし』とあるのは、至極尤もな教訓であらうと思ひます。殊に今日の教育を受けた人達は、兎角教育の力を頼みにして、自分を夫と同等の位置に置き、甚だしきは夫を敷物にもし兼ねまじき權幕で、盛んに雄辯を弄するといふやうなものもあるといふ事でありますから、斯ういふ人達には一層注意して貰ひたい微妙なる教訓の一つであると信じます。

更に其の次に不忍とありますのは、殘忍といふことで、人情に外れた行ひのあるのを戒めたもので御座います。斯ういふのは世に例の乏しいことであらうと思はれます。そして其の次々に書いてある事柄も何れも異存のないことばかりで、夫唱婦隨の本義を守つて行かうとい

ふのには、是非共斯くあらねばならぬことで御座います。

又『夫問ふことあらば正しく答ふべし。其の返答疎かなるは無禮なり』とありますのは、特に注意して其の眞意を翫味致さねばなりません。

夫に限らず總て他から物を問はれた時には、出来るだけ正しく答へなければならぬので御座いますが、それが他人同士であると比較的容易く行はれますけれども、夫婦の間となりますと、動もすれば親しきに狎れて、つい疎かになり勝つたもので御座います。斯くして誠につまらない一寸した事から、夫婦喧嘩の種子を蒔くやうなことにもなるのでありますゆゑ、夫から問はれた事に對しては、たとひそれが正しく返事をする程の價値のないものであつても、努めて其の返事を疎かに

しないやうに致したいもので御座います。

「夫若し腹立て怒るときは恐れて順ふべし云々」とあるのは、如何にも極端な言ひ方のやうであります。すべて物事は、其の弊を矯めよとするとするには、勢ひ極端な詞を以てしなければ、その功を奏するとの出来ぬものであります。例へば曲つた物を直くしようとするのには、唯真直にしただけでは、又直ちに元の曲れる形に戻つてしまひます。そこで之を反對の方向に思ひ切り曲げるといふやうにして、初めてよい加減なことになると同じ道理で、夫の怒りに對しては、恐れ従ふといふ位の覺悟を以て居たならば、丁度よい頃合に一家の平和を保つて行けるであらうと思ひます。諺にも「一文錢は鳴らぬもので

ある」と申します。夫の怒つて居る場合に、此方も怒つて之に及向ひましては、それこそ大變です。何も眞實に恐れるには及びますまいけれども、そこは旨く調子をとつて、一文錢の鳴らぬ工夫をするのが、人の妻たる者の大切な心掛なので御座います。

又、福澤先生も申されたやうに、夫を以て天とするといふことは、男女同權といふ方の考から見ますと、餘りに夫のみを崇め過ぎた言ひ方のやうにも思はれますが、「天に二日なく、國に二王なし」といふ意味から、深く考へて見れば、夫を天の地位に置き、妻は地の位置に立つて、十分に夫に敬意を表するといふことは強ち道理のないことではあるまいと思ひます。それに、夫を尊敬するからと言つて、何も極端

に自分を卑下するには及ばない事でありませう。夫を尊敬しつゝ、自分も相當の品位を保つといふ事は、決して出来ないことでは御座いません。

七、兄公、女公は、をつとの兄弟なれば敬ふべし。夫の親類に、謗られ憎まれるれば、舅姑のこゝろに戻きてわが身のためにも宜しからず。睦じくすれば舅姑の心にも協ふ。また嫂をしたしみ膠敷くすべし。殊更夫の兄、嫂は厚く敬ふべし。わが昆姉とおなじくすべし。

此の一節は、夫の兄弟姉妹や、その配偶者や、そして夫の親戚等に

對しての大體の心得を説いたもので御座います。これ等の一々の場合をそれぞれに詳しく説いたならば、實に限りのない程澤山ありませうけれども、先づ其の根本義とでも申すべきもので、是非共心得て居るべき事柄はと申しましたならば、大要こゝに説いてあるだけのことです。宜しからうと思ひます。

敬ふといふ事と、親しむといふ事と、そして睦じくするといふ事は、私共の家庭生活の、尊嚴と、和氣と、情味とを保つために、缺くことの出来ない、必要な條件で御座います。そして、之を旨く保つて行かうといふのには、妻たる者は、自分は他から嫁いで来たものであるからといふやうな、分け隔ての生じ易い、他人行儀になり勝ちなも

のでありますが、さやうな考を持つてはなりません。何處までも無邪氣に實直に、自分の生れた父母の家に居ると同様の心持ちで、形ばかりの敬ひとならぬやうに、心と心とが融け合つた睦じさを感じるやうに心がけたいものであります。さうしたならば舅姑との折合が悪いとか、兄公、女公との間柄が面白くないとかいふやうな、面倒な問題を生ずることなしに、永久に家庭の和樂を味ふことが出来るであらうと思ひます。

八、嫉妬の心努々發すべからず。男淫亂ならば諫むべし。怒り怨むべからず。妬み甚だしければ、其の氣色

こと葉も恐ろしく、すさまじくして、却つて夫に疎まれ、見限らるゝものなり。若し夫不義過あらば、我が色を和げ、聲を雅にして諫むべし。いさめを聽かずして怒らば、まづ暫く止めて、後に夫の心和ぎたるときまた諫むべし。必ず氣色を暴くし、聲をいららげて、夫に逆ひ背くことなかれ。

嫉妬は、女子の最も慎まねばならぬことの一つで御座います。之は夫に對した場合のみに限つたことではなく、全く他人に對した場合、又はお友達に對した場合などにも兎角に、淡き濃き、さまざまの嫉妬

心を發し易いのが女子の常弊で御座いますして、これを慎むといふ事は甚だ困難なことのやうに思はれて居ますけれども、そこは不斷の修養の力で何うにもなることですから、如何様にもして、之を慎まなければなりません。

そこで、夫の身に何か不都合なことがあつて、之を諫めるといふ場合にも、嫉妬がましき氣色や言葉は、決して用ひてはなりません。若し然ういふ素振が少しでもありましたならば、折角の諫言も、啻に効果がないばかりでなく、却つて反對の感を招いて、前よりも一層面白くないやうな結果にもなります。何れの男子にも有り勝ちな、意地張とかいふやうなものが出て来て、所謂藪蛇になつて仕舞ふものであります

ます

では、斯かる場合には、何うするのが一番よいかと申しますと、前の本文にありますやうに、我が色を和げ、聲を雅にして諫めるのが最も有力な、そして巧妙な方法であります。

若し斯くしても聞き入れて貰へないとか、これでも矢張り怒つて仕方がないとかいふやうなことであつたならば、其の時は、たとひ何と言はれても、一切争はずに、其の儘にして置いて、また折を見て、夫の心の和いで居る時を利用するのが、最も賢い方法なので御座います。

「柔よく剛を制す」といふのは、つまり此の事なのであります。「点滴力なくして石を穿ち、春風、軟にして氷を解く」といふのは、即ちこ

この道理を指したものであります。

但し、前に云ふ所の柔は、何處までも柔であつては無効です。表面は飽くまでも柔であるけれども、内心には、篤く信じ、堅く守る所があつて、毅然として犯され難きものがなくてはなりません。

九、言語を慎み、多くすべからず。假にも人を誹り、偽をいふべからず。人の謗を聞くことあらば、心に修めて人に傳へ語るべからず。謗をいひ傳ふるより、親類とも間悪しくなり、家のうちをさまらさず。

西洋の諺に「婦人の舌は羊の尾の如くゆらぐ」といふのがあるさう

ですが、女子の多辯饒舌なる事は、西洋も東洋も同じことであると見えます。

又古語にも、「多言は衆の忌む所、若し樞機を慎まずんば、災厄これより始らん」といふことがあります。兎角、言語に慎みのない所から一家の平和も破れ、親戚間の不和をも生ずるやうなことになるのであります。虚言とか、流言とか、中傷とか、又は誹謗とか、讒誣とか、悪口とか、陰口とか、差出口とかいふやうな言語に就いて最も忌むべきもの、數々は、何れをも多辯饒舌といふ言語に就いての十分なる慎みのない所から出て來るのでありますゆゑ、何うしても語らねばならぬといふ必要のある場合の外は、つとめて沈黙を守り、寡言を守るやう

にしたいたいものです。さうしたならば、言語のために種々の災厄を招くやうなことは決してないであらうと思ひます。

たとひ人からいろいろの風評を聞くことがあつても、要なきことは決してお饒舌をしないといふ一つの慎みがありさへすれば、之を更に他に語り傳へるとか、言ひ觸らすとか、いふやうなことがありませんから、之がために、他に迷惑を及ぼすやうな虞れがなく、従つて他から誤解を招く心配もなく、常に心を安んじて、樂しき日暮しをすることが出来るであらうと思ひます。

十、女は常に心遣ひして、其の身をかたく謹み護るべ

し。朝は早く起き、夜は遅く寝ね、晝はいねずして、家の内の事に心をもちひ、織、縫、績、緝怠るべからず。又茶酒など多く飲むべからず。歌舞伎、小うた、淨瑠璃などの淫れたる事を見聞くべからず。宮、寺など都て人の多く参るところへ、四十歳より内は餘りに行くべからず。

昔と今日とは餘程時勢が變つて來ては居りますけれども、固より根本から變つて居る譯のものでもありません。昔の教を其の儘用ふることは出来ないまでも、之を少しく變更して當て箴めて行けば、決

して用ひられない譯のものではありません。

右の一節の如きは即ち此の一例であつて、その儘今日に用ひられる部分と、多少趣きを變へて其の精神のみを取らねばならぬ部分とがあります。

女子は萬事に意を用ひて其の身を持つことは極めて謹嚴でなければなりません。目に見るもの、耳に聞くもの、心に思ふこと等總ての事柄に、常に深き注意を怠つてはなりません。又飲食の事などにも、十分に注意を致さねばなりません。その他今日で申せば必ずしも宮、寺とのみには限りませんが、多くの人の集合する場所には猥りに出入しないやうに致さねばなりません。

固より今日の女子は昔ほどに多くの束縛を受くることなく、稍開放せられて居る點がありますので、世間との交際上已むを得ずして、公衆の多く集る場所に行くことは、決して差支はありませんけれども、多少は自由の利く時節になつたといつて、それをよい口實にして、徒らに名を交際に藉りて、屢々公衆の席に出かけて行くといふやうなことがあつてはなりません。殊に四十歳前位の時は、妻としても、主婦としても、又母としても最も家庭内に用事の多い時であると共に、世間からも種々の誤解を受け易い時で御座いますから、昔のやうな譯には參らないまでも、これ等の點に關して十分に謹慎する所がなくてはなるまいと思ひます。

朝は早く起き、夜は遅く寝ね、晝は一家庭内のことに、出来るだけ心を用ひて働かねばならぬものであるといふやうなことは、茲に改めて申すにも及びますまい。そして、裁縫や料理等に就ても、一家の主婦たる者は、自ら之に當つて決して不都合のないやうに致さねばなりません。尤も今日では、織ることや、績むことや、緝ぐことなどは、普通の家庭ではしなくてもよいやうになりました。その代り、又種々の新しい用事が殖えて来て居りますから、今日の女子とても、昔の女子と同様に最も勤勉に家庭内の仕事に携はらなければなりません。

十一、巫覡などのことに迷ひて、神佛を汚し近づき、猥

に祈るべからず。只人間の勤をよくする時は、禱らずとても、神佛は守りたまふべし。

昔は唯夢想せられて居たゞけで、とても及ばぬ願ひとせられて居つた空中の旅行も、今日では、誠に自由に空中が飛行の出来る世の中となりました。學問の進歩と技術の發達との著しいがために、昔の世には解釋の出来ない不思議な事とせられて居つたものまでが、今日ではそれぞれに、相當な説明が加へられるやうになりました。それゆゑ、迷信の範圍も段々狭められて來なければならぬ筈なのでありますが、何ういふものですか、今も猶昔と同様に、迷信の勢力は、随分強いや

うで御座います。殊に女子にはそれが多いやうで御座います。

素性も分らぬ怪しい者を神佛として信仰し、又は何か願ひ事でもある時には、謂れなき事をも神佛に願ひ、或は人中では言はれぬ事をも矢鱈に神佛に祈誓を掛くる人もあるやうですが、斯ういふ場合に、窺に神佛の加護を求めるといふことは、取りも直さず手前勝手のために神佛を煩はすことゝなるので、寧ろ畏れ多い次第とでも申すべきでありませう。

されば、昔の道歌にも、「祈れどもしるしなきこそしるしなれおのが心に誠なければ」とありますのは、こゝの所を、實によく言ひ表したものであると思ひます。それゆゑ、つまらぬ迷信のために心を動かす

よりも、常に人間たる勤を怠らぬ様にして、「心だに誠の道に叶ひなばいのらずとても神やまもらむ」といふことに、心がけるのが、何よりも大切なことであらうと思ひます。

十二、人の妻となりては、其の家をよく保つべし。妻の行ひあしく放埒なれば家をやぶる。萬事儉にして費をなすべからず。衣服飲食なども、身の分限に随ひ用ひて、奢ることなけれ。

此の頃（大正二年）は何處へ行つても生活難の聲が聞えて居ります。これには固より種々の原因があることでありませうが、その主なる原因

ともいふべきものは、日清、日露の兩戰役以來、國民の精神が俄に緩んで来て、知らず識らずの間に、衣食住共に奢侈に傾くやうになつた結果ではあるまいかと思ひます。殊に近來は萬事に新しい流行を作る事が烈しくなつて來ましたが、その内でも、婦人の風俗の華美になつたことは、實に驚くべきもので御座います。

大抵の家庭では、一家の經濟の四分の三以上の金額は主婦の手によつて支拂はるのでありますゆゑ、妻たり主婦たる者の心がけ一つで一家の經濟は健全にもなれば、又不健全にもなります。そこで家持を上手にして行かうといふのには、「入るを計りて出づるを制す」といふ大體の方針の上から、萬事を出来るだけ儉にして、費を省き奢りを慎

みて身の分を守り、度を越えないやうにすることが、一番大切な心得であらうと思ひます。

十三、若きときは、夫の親類友だち下部等のわかき男には、うちとけたる物がたり近づくべからず。男女の隔てを固くすべし。いかなる用ありとも若き男に文など通はすべからず。

此の一節は、男女の別を正しくすべきことを、最も嚴格に説いたもので御座います。昔と今日とは全く同様には申されましますまいけれども男女交際に致しました所で、監督者のない自由交際の道が、新に開か

れるやうになつたわけでもありません故、矢張り、若き男女は、その隔てを固くして、成るべく嫌疑に遠ざかるやうにした方が無難であらうと思ひます。

事實があれば無論のことですが、たとひ事實がないにしても、あらぬ浮名を立てられますと、そのために非常な迷惑を受けねばならぬこととなります。此の點になりますと、今は故人となられた税所敦子刀自の如きは、餘程周到に注意いたされたやうで御座います。之も故人となられた高崎正風男の、嘗て税所敦子刀自を弔はれた文章の中にある次の一節を讀みますと、刀自の用意の程が、明かに窺はれるので御座います。

「正風、嘗て君に就きて歌談を聞く。訪ふ毎に一婢ありて、君が傍を離れず。また、正風が詠草を返付せらるゝ毎に、必ず正風が母もしくは姉にあてゝ送らる。當時、其の何故たるを解せざりき。今にして思へば、嫌疑を遠ざくる用意の周到なりしなりけり」
若し據のない用事のあつた場合としても、若き男子に對しての文通は、十分に注意する所がなければなるまいと思ひます。況んや祕密に文通するなどの事は、斷じて之を避けなければなりません。

十四、身の莊も、衣裳の染色模様なども、目に立たぬ様にすべし。身と衣服との穢れずして潔なるはよし。勝

れて清らを盡し、人の目に立つほどなるは悪し。たゞ
我が身に應じたるを用ふべし。

開け行く御代の有りがたさには、汽車に、汽船に、飛行機に、電信に、電話に、ラヂオにといふ風に、次第に交通の機關が完備して参りますので、都も鄙も一樣に、文明の恩澤に浴することが出来ます。否音にそればかりでなく、居ながらにして外國ぶりをさへも自由に知ることが出来るやうになりました。斯様なことは、箱根八里を駕籠で越し、大井川を雲助に擔がれて渡つた昔の人の夢にも知らぬことで、私のやうに、年は取つて居りましたが、世の遷り變りを次第々々に見も

し聞きもして参りました者は、段々に慣れて來て居りますから、それ程に驚きも致しません。若し假りに、六、七十年前に死んだ人が、今日突然に蘇生して出て來たものと致しましたならば、その驚きは實に非常なものであらうと思ひます。

世の中が此のやうに著しく進歩したのは、誠に喜ぶべきことで御座いますが、それと共に便利に伴ふ悪弊とでも申しませうか、髪飾、身の飾は固より、すべての事が兎角華美に流れ勝ちになりましたのは餘程注意しなければならぬことであらうと思ひます。

本文にもありますやうに、總ての事が、極めて質素であつた昔でさへも、身の飾や衣服の模様などの華美になるのを戒めて、成るべく目

立たぬ様にと、注意せられて居たのでありますのに、それが今日の如く、思ひの儘に交通の便を利用することが出来て、萬事に自由の利の上に、後から後からと、さまざまの新しい贅澤品の工夫せらるゝ世の中となりましては、特に一層之を戒むるやうに致しませんと、さらぬだに誤られ易き虚榮心のために、遂には浮ぶ瀬のないやうなことになるであらうと思ひます。

そこで最も必要な注意としては、第一に清潔といふことに重きを置いて、清潔であつて小ざつぱりとしたものでさへあれば、外見とか裝飾とかといふことは何うでもよいといふ位に考へて居れば、丁度よい位のものでありませう。次には又身分相應といふことも考へなければ

ばなりません。此の點なども、士農工商の區別のやかましかつた昔と違つて、今日は餘程亂れて來て居るやうで、随分身分の低い人が服裝ばかり立派にして、威張つて居るのが少くないやうに見受けられます故、出来るだけ注意して、我が分際を越えぬやうに致したいもので御座います。

十五、我郷の親の方に私して、夫の方の親類を次にすべからず。正月節句などにも、先夫の方を勤めて、次にわが親の方をつとむべし。夫のゆるさゝるには、何方へも行くべからず。私に人に饋ものすべからず。

此の一節は、主として親族間の交際に就ての、最も大切な心得の筋道だけを書かれたもので御座います。即ち、我が生家及び之に屬する親類との本末輕重をば、十分によく考へて、特に一方に厚くして一方に薄くするといふやうなことのないやうに、その間の調子をうまく取つて行く工夫をしなければならぬものであるといふことの大體の注意を示されたもので御座います。

何れの家庭でも、親類間の交際の衝に當る者はと申しますと、之は必ず一家の主婦たるもので御座いますから、一家の主婦たるものは、常にこの點に就いて十分注意いたさなければなりません。世間によくあり勝ちな、親類間に不和を生じて一門一族のものから爪弾きせられる

といふやうなのは、つまりこの親類間の交際が程よく行はれて居ないからのことです。それ故、この交際に些の不都合もないやうにして行かうと申しますには、嫁しての後は何よりも夫及び夫の家を重んずるといふ考から、總ての場合に夫の親類を先にして、自分の生家の事は二の次といふことにして置きましたならば、決して間違ひはあるまいと思ひます。

どなたも御存じのことでありませうが、かの源賴朝の夫人政子は、智略といひ、器量といひ、まことに傑れた方で、眞に男優りの方であつたやうで御座いますが、惜しい事にはこの邊の修養が足らなかつたと見えまして、この教とは反對に、事毎にその生家たる北條家並にそ

の一門一族の利益と幸福とを先にせられたことは、歴史の上でも明かな事實で御座います。尼將軍といはれたほどの偉い婦人でも、さすがに婦人だけに、かういふ點になると、こんな間違つた事があります。まして普通の婦人には、知らず識らずこのやうなことをすることも有り勝ちですから、お互に警め慎まねばならぬことで御座います。

更にその上の心得としては、稍煩はしいことであるかもしれませぬが、何方へ出かけて行く場合にも、又誰に些少ばかりの贈物をする場合にも、必ず夫に相談した上のことにするといふ風にいたしましたならば、必ず必ず圓滿に親族間の交際をつゞけて行くことが出来るであらうと信じます。

十六、女は我が親の家をば續がず舅姑の跡を繼ぐゆるに、我が親よりも舅姑を大切におもひ孝行を爲すべし。嫁して後は、我が親の家に行く事も稀なるべし。まして他の家へは大方は使を遣はして音問をなすべし。又我が親郷のよき事を誇りて讃めかたるべからず。

生の親より受けたる高恩は、固より之を忘れてはなりませんし、又之に報いる所がなくてはなりません。が之に報いる方法としては、必ずしも日夕兩親の膝下に侍するのみに限りません。之は男子とても同

じ事なので御座いますが、況してや女子は、相當の年齢に達すれば、必ず他家に嫁するといふことが、普通の慣習となつて居るので御座いますから、斯かる場合に於いては猶且親の恩に報い得るだけの方法を考へなければなりません。

一體孝行といへば、是非とも親の側に居て萬事に行きわたつて、親のお世話をしなければならぬもの、やうに思はれますが、之は孝行の一部分であつて、決してその全體であるとは申されません。古語にも「大孝は親を尊ぶ、其の次は親を辱しめず、其の下は能く親を養ふ。之を三孝と云ふ」とあります。又孔子も「犬馬に至るまで能く養ふ」とあり、敬せずんば何を以てか別たん」と申して居られます。唯よく

養ふだけを以て孝行の全體であるかのやうに思ふのは大間違ひです。

斯うした譯のものであります故、嫁しての後には、兎角思ふやうには實家の父母に盡すことが出来ないなど、考へる必要は御座いません。又親としても、一旦娘を他家に嫁けた以上は、之からは相當の世話を受けようなど、いふことは、夢にも思つてはなりません。親にも、娘にも、斯ういふ考を持たせぬやう、持たぬやうにして、舅姑こそは、我が實の親よりも一層大事なものであるといふ考から、お舅大事、お姑大事と、よく之に忠實に仕へて、少しの風波も起らないやうにするのが、實の親に對しても此の上なき大孝であると思はねばなりません。何故かと申しますと、實の親の安心するやうに、又その名を辱しめぬ



やうにするのが、眞實の孝行となるからで御座います。

それから、言ひ出す折さへあれば、兎角に實家の自慢をしたがるといふ風のもものが、よく世間にある例で御座いますが、これは最も慎まねばならぬことで御座います。斯ういふのは、固より其のつもりといふ譯では御座いますまいが、取りやうでは、「此家よりも實家の方が遙かによい」のだから、氣に入らぬ事があれば、何時でも實家の方に引き上げますよ」といふ風に聞えないとも限りません。

中にはまた、我れを飾り我れを繕ひ、之によつて驕り高ぶる醜風即ちはかない虚榮心から、つい實家の自慢をして我が身に箔をつけようとするものもあるやうです。何れにしても大いに心得違ひと申すべき

で、よくよく慎まねばならぬことです。よし生家の事を讃めたり自慢したりするつもりでなく、たゞありのままを申すやうな場合にも、注意しないと生家自慢のやうに誤解せられることが少くありません。誰れにしても、久しく慣れて来た事はそれが一番よいやうに思はれるものですから、生れた家で永年慣れ来たことを便利と思ひもし、言ひもするのはありがちですが、かうしたことも、場合によりては生家自慢といふやうな意味に取られることも少くないものです。夫大事、家大事、何事にも我れをすて、夫の家風に慣れ、一日も早くこの家のものになりてしまはうとの心がけが最も大切で御座います。

昔は嫁入りの首途の躰として、必ず懐剣を與へましたもので、之は

愈々と云ふ場合には、我と我が命を絶つても決して實家に歸つて來てはならぬぞといふ意味のものであつたのです。此の心がけだけは、今日の女子にも是非持つて居て貰ひたいものだと思ひます。既に此の心がけがあつて、たとひ如何なる事があらうとも、再び實家には歸るまいといふ決心さへありましたならば、實家を當てにするといふ氣は少しも起り來る筈がないので、實家の自慢などすることはなくて、夫の家大事、舅姑大事と、心から盡すことが出来るであらうと思ひます。

十七、下部餘多めしつかふとも、萬の事自ら辛勞を忍へて勤むる事女の作法なり。舅姑の爲に衣を縫ひ、食を

ととのへ、夫に仕へて衣を疊み、席を掃き、子を育て、汚を洗ひ、常に家の内に居て、猥に外へ出づべからず。

徒手坐食といふ言葉をその儘に、何にもしないで、遊んで居て暮らされるのを一種の誇りのやうに思つて居る人が昔は少くなかつたといふことです。で、何うかすると此の間違つた遺風が今日にも残つてゐて、總ての事を女中任せ、雇人任せにして置いて、自分は何一つしないで居るのが、立派な貴婦人の資格とでもいふべきものであるかのやうに、考へて居る人が偶にはあるといふことですが、私は、凡そ世の中にこれ程の大きな思ひ違ひといふものはあるまいと思ひます。何も

今更らしく改めて申すまでも御座いませんが、私共の身體は、働いために授けられたもので、その證據には、世にも私共の身體程に、働くのに都合よく出来て居るものは御座いません。何れ程に巧みに出来て居る機械と申しました所で、人間の身體のやうに、何處から何處まで都合よく完全に出来て居るものは御座いません。して見ますと、これほどに重寶に出来て居る身體を使はずに居るといふことは、實に惜しいことでは御座いませんか。

それに、どんな機械でも使はずに置けば錆が出るのと同じことで、身體も使はずに居ると病氣といふ錆が出るやうになるものであります。成るべく之を使ふ工夫をした方が、健康を保つためにも良いことであ

らうと思ひます。殊に舅姑や夫や子女のために、是非ともしなければならぬ裁縫や料理や洗濯等は無論のこと、一家の裝飾から整頓、修繕、清潔等の事に至るまで萬事萬端に行き亘つて、自分が先に立つて働くやうにしなければならぬ筈のもので御座います。總ての事が主婦自らの手によつて處理せられて居るやうでなくては、到底一家は圓滿に治つて行くものではありません。何も彼も女中任せにして置いて、或は交際のためであるとか、或は何々會に出席するためだなど、いふのを口實に、終日外に出歩いて居るといふ有様では、一家團樂の樂みが得られやう筈がありません。それ故に一家の主婦たる者は出来るだけ家庭の内に居て、無上の樂みを此處に見出すやうにしなければならぬも

のであらうと思ひます。

十八、下女をつかふに心をもちふべし。云甲斐なき下
藤は習はしあしくて智慧なく、心奸しく、物いふ事祥な
し。夫のこと、舅姑嬪の事など、我が心に合はぬ事あ
れば、猥に讒り聞せて、それを却りて主のためとおもへ
り。婦人もし智慧なくして、これを信じては、必ず恨
み出来易し。元來夫の家は皆他人なれば、恨み叛きて
恩愛をすつる事安し。かまへて下女の詞を信じて、大

切なる舅姑嬪の親をうすくすべからず。もし下女すぐ
れて多言しくて、悪しき者ならば、早く追出すべし。
箇様のものは必ず親類の中をも云ひさまたげ、家をみ
だす基となるものなり。恐るべし。又卑き者をつかふ
には、氣に合はざる事多し。それを怒り罵りて止まされ
ば、せはくしく腹たつこと多くして、家のうち静な
らず。悪き事あらば、折々いひ教へて誤を直すべし。
すこしの過は忍びていかるべからず。心の内にはあは
れみて、外には行規を固く訓めて怠らぬやうにつかふ

べし。與へ惠むべき事あらば、財を惜むべからず。但し我が氣に入りたりとて、用にも立たぬ者に、みだりに與ふべからず。

此の一節は、女中を使ふについての注意を細かに説いたもので御座います。何も女中であるからと申して、悪い者とばかりに限つたことは御座いません。中には随分感心な心掛のよい者も御座いますが、多くは奉公人根性とかいふやうなものがあつて、動もすれば主に諂つて、御機嫌取りや忠義立に、言はでもよき事を饒舌りたがるもので御座いますから、餘程注意致しませんと、ついた女中の言葉の端から、一

家の平和を破るやうな大事件が湧いて来るやうなことになるります。

とりわけ大勢の女中でも使つて居るといふ家では、女中の中に、奥様最良なものと御隠居様最良なものとがあるといふやうなことになるつて、有ること無いことが、雙方の耳に入り、其のために、遂には誤解に誤解を重ね、疑惑に疑惑を生じて誠に面白からぬ日暮しをしなければならぬやうになり、之が嵩じては、一家に風波の絶間のないやうなことになるので御座います故、女中の良否といふことには、常に最も注意いたさなければなりません。

けれども斯ういふのは、必ずしも女中が悪いとは限られません。女中の一寸した告口にも、特に興味をもつて之を聞くといふやうな所か

ら、段々に女中に悪い智慧を出させるやうなことにもなるのでありますから、強ちに女中のみを責めることは出来ません。主婦たるものは自らよき模範を示すといふ覺悟で、何うせ足らはぬ勝である筈の女中達を教へもし、導きもするやうに致さなければなりません。

又諺にも「他人を使へば苦を使ふ」と申してありますやうに、他人を使ふといふことには、さまざまの苦痛が伴ふものであります故、氣に入るとか入らぬとか、自分の思ひ通りになるとか、ならぬとかいふ事のために、怒りに乗じて口やかましく小言をいつたり罵つたりすることのないやうに、如何なる場合にも精神を落ちつけて、同じ小言をいふのにも、怒りつけたり、叱りつけたりするのでなく、諄々と教へ

諭すといふ風にしてやりたいものと思ひます。

手島堵庵先生の「我がつゑ」といふ心學の書の中に出て居る詞に、「人を遣ふには、必ず眞實に愛して遣ふべし。遣はるゝ人、已に背く事あらば唯眞實なきゆるゑなりと知るべし。これ則ち我が信なき印のあらはれたるなり。眞實に愛して遣ふに、悪しく成る人は甚だ少きものなり、其の眞實の手本には我が子に思ひ比ぶべし。遣はるゝ者も皆人の子なり。その親々、何とぞ能くそだて、貰ひたく思ふは、我が子のよくならんことを願ふと同じ事なり」といふ事があります。

これこそ實に人を遣ふ者の是非とも心得て居るべき一種の祕訣とでもいふべきもので、一家の主婦たる者が、女中を遣ふ場合に當つて、

常に此の愛憐の情と、眞實の心とを以て、之に臨むやうに致しましたならば、普通の場合にあり勝ちな多くの弊害を生ずるやうなことはないであらうと思ひます。尤も餘りに愛し過ぎて、却つて恩に狎れさせるやうなことがあつてもなりませぬ故、寛にも嚴にも共に其の宜しきを得るやうにするといふことは、主婦たる者の最も注意すべき大切な點であらうと思ひます。

十九、凡そ婦人の心さまのあしき病は、和ぎ順はざると、怒り恨むると、人を謗ると、物妬と、智慧あさきことなり。この五疾は、十人に七八は必ずあり。これ婦人の

男に及ばざるところなり。自ら顧みいまして改め去るべし。中にも智慧の淺きゆゑに、五つの疾も發る。女は陰性なり。陰は夜にて暗し。所以に女は男に比ぶるに、愚にて目前なる然るべき事をも知らず、又人の誹るべきことをも辨へず、わが夫、わが子の災となるべき事をも知らず、科もなき人をうらみ、怒り、呪詛ひ、あるひは人をねたみて、わが身ひとり立てんとおもへど、人に憎まれ疎まれて、みな我が身の仇となることを知らず。最とはかなく淺猿し。子を育つれども、

愛に溺れて習はせ悪しく。かく愚なる故に何事もわが身を謙りて夫にしたがふべし。古の法に、女子を産めば、三日床の下に臥しむといへり。これも男は天に譬へ、女は地に象るゆゑに、萬の事につきても、夫を先だて、我が身を後にし、わがなせることに能事ありとても、誇る心なく、亦あしき事ありて人にいはるゝとても、諍はずして早くあやまちをあらため、重ねて人に謂れざるやうにわが身を慎み、また人に侮られても腹たち憤る事なく、能く堪へてものを恐れ慎むべし。

斯の如く心得なば、夫婦の中、おのづから和らぎ、行末ながく連れそひて家のうち穩なるべし。

これまでも度々申しましたやうに、昔と今日とを比較致しますと、すべての點に於いて、實に驚くほど進歩して居るので御座いますが、その中にも女子教育の進歩は特に著しきもの、一つで御座いませう。女子の教育は全然無用のものであるとまでに言はれて居つた時代に比べて全國到る處に、高等女學校や實科高等女學校が設立せられるやうになり、年々歳々いよいよ盛んになりつゝ、ある我が女子教育の有様を見ましては、たゞたゞ時勢の進歩に驚くの外はないと思ひます。

併しながら、これ等の進歩は、固より進歩には相違御座いませんけれども、多くは形の上だけの進歩で、その實質の方の進歩はといふことになりますと、聊か疑はしい點がありはしないかと思ひます。殊にこれは誰方にも認められて居るやうで御座いますが、知識の方の側がすぐれて進歩してゐる割合には、徳操の方の側は、何ういふものか之に伴つて居ないやうに見受けられます。それ故、斯くばかり女子教育の進歩したのにも拘らず、本文に示されて居る婦人の五疾は、今日も猶、依然として治療せられず其の儘に残つて居るやうで御座います。一々例を擧げて居ては甚だ煩はしくなりますから、總括して申しますが、五つの疾は啻に治療せられて居ないばかりでなく、ある方面から

見ますと、近來は特に甚だしく病勢が募つて來て居はしないかと思はれます。

昔の婦人も容易に和ぎ順はなかつたでありませうが、今日の婦人の和ぎ順はないのは一層ひどいやうです。少しばかり學問の出來て來たのや小理窟の言へるやうになつたのを何よりの誇りとして、親に對しても、又夫に對しても、随分思ひ切つて反抗するのが少くないといふことです。従つて怒り恨むるといふこともなかなか烈しいやうでありますし、又いろいろと威張ることを覺えて來て居るので、人を誘う方にかけても一寸拔目のない趣きがあるやうです。そして又世の進歩に伴つて見聞の方は次第に廣くなつて來るにも拘らず、女子の量見は昔

の儘に狭い所から移り兼ねて居るものと見えまして、物妬みする心の強いのは、實に驚くほどだといふことで御座います。それでは智慧の方は何うであらう、學問が進んだから餘程深くなつて居る筈だがと、一寸は思はれるわけで御座いますが、なかなかさうは參つて居りません。女の浅智慧は今も昔も同じことです。今日の女子は、學校でいろいろの事を學びますけれども、唯徒らに多方面に亘つて居て、門戸が廣いといふばかりで、奥行の深みといふものは少しもありません。今日は女子も確に進歩はして居ますけれども、男子方の進歩の度合は無論これ以上で、殊にこれには深みといふものがありますから、迎も女子の及ぶ所ではありません。それにも拘らず、非常に進歩してゐて少

しも男子に劣る所はない、何うかすると男子に優つて居りはせぬかなどといふ、女子特有の自惚心から自分の實際の力をも顧みずに、無暗と威張ることばかり覺えて來ましたので、餘程始末が悪いといふことです。これが爲に種々の間違ひをしでかすことは、昔よりも遙かに多いといふ話です。

こんな有様では五つの疾を醫して快方に向はせるといふことは、いよいよますます困難になるばかりであります故、こゝは一つ奮發して、徒らに學問の生嚙りをするのを止めて、道徳を基礎とした學問の奥義を究めるやうにして、萬事萬端に亘つて、女としての慎みを失はぬやう「女大學」の本文通りに夫を先だて、我が身を後にし、誇る

心や、怒る心や、妬む心などは成るべく出さぬやうにし、謗らず、諍はず、すべてに和順を旨として、夫婦和合、一家團樂の樂しみを得るやうに致したいもので御座います。

尙この本文にもありますやうに、昔から男は天に譬へ、女は地に象り、又男を陽性とし、女を陰性としてあるのには、實に深き理由のあることで、種々の點から考へて見ますと、如何にも然うした譯のものであらうと思はれる節々が多いのであります。故に如何なる場合にも此の事を考へて、天地陰陽の道理に従つて行くやうに致しましたならば、決して不都合や間違ひを惹き起すやうな事はないであらうと思ひます。

右の條々、稚きときより訓ふべし。又書き付けて折々讀ましめ、忘るゝことなからしめよ。今代の人、女子に衣服道具など多くあたへて、婚姻せしむるよりも、この條々をよく教ふる事、一身を保つ寶なるべし。古語に、人よく百萬錢を出して女子を嫁せしむる事を知りて、十萬錢をいたして子を教ふる事を知らずといへり。誠なるかな。女子の親たる人、この理を知らずんばあるべからず。

改めて申すまでもなく「女大學」の本文は、一々箇條書にしてあつて甚だ簡單なものではありませんけれども、何れも要を得たものばかりで、昔の女子には實に唯一無二の大切な教科書となつて居たのであります。私の及ばぬ註釋から、却つて本文の眞意を誤るやうなことになります。つたかは知りませんが、昔と稍事情を異にして居る今日の時勢に、成るべく當て嵌まるやうにと、多少の老婆心的注意を加へて置きました積りであります。何うか其のお積りで、本文の著者の希望に副ふやう、又註釋者たる私の希望をも叶へて下さるやうにありたいもので御座います。

「人よく百萬錢を出して女子を嫁せしむる事を知つて、十萬錢を出し

て子を教ふる事知らず」とありますのは、實に古今同歎と申すべきではありませんまいか。成程今日は娘を女學校に入れて、相當の學問をさせるやうにはなりましたけれども、若しこれが一時の流行に動かされて居るといふ風のもので、唯女學校卒業といふ名義上の資格を得るためのみのものでありましたならば、前節で申したやうな結果に陥つて何等の効果もなきものとなりませう。で私は精神的の學問、所謂性根を作る眞實の學問といふことに重きを置くやうにして戴きたいものと思ひます。

口耳三寸の學問は何の役にも立ちません「百聞は一見に若かず」とは能く申すことで御座いますが、私は之と同じ意味で「百言は一行に

若かず』と申して見たいと思ひます。長い間の學校學問で、唯お饒舌をする事ばかり覚えて来たのでは一向感心致されません。聞いたこと、見たこと、知つたこと、何れも之を實地に行ふやうに致したいもので御座います。

評釋 女大學 (終)

附錄 棚橋絢子刀自隨感錄

私の長壽秘訣四ヶ條

(この一文は昭和十二年四月六日東京中央放送局より放送されたお話の全部です。先生の御苦勞を思ひ、お互の生活を反省いたしませう)

儒學に志す

私が召使の女に伴はれて手島講釋を聴きに参りましたのは、十一二歳の頃であつたと記憶して居ります。手島講釋とは其頃(その頃)に於ける社會教育の一つでありまして、古聖前賢の教を至極平易簡明に、婦人、子供にも分り易く説き示す所の、教育機關外の教育でありまして、今日でも鳩翁道話など申す書籍も間々傳はつて居ります。

然も私が聴講しました時は、先生が孟子の中の無名の指の一節を講じて居られました、無名の指即ち俗に紅指指と申せば、小指の隣で人體に在りては、一番用のない指であるが其れすら折れたりすれば十里、二十里は愚か、百里、二百里を距つる醫者を探して、治療を乞ふ者數を知らざる世の中に、何とて我大切なる心の歪み曲りを、數多く眼の前に受診者を待ち構へて居る名醫、即ち儒學者乃至宗門の智識が居るのに、往きて其教を聴き之を治愈する事に留意せざるぞ、扱も歎かばしき極みであると懇切丁寧に説き聽かせて居られた時でありました。

私は深く感動して歸りましたが、當時は女子が儒學を學ぶなど申す事は、世の中の嘲笑を買ふばかりであることを心得て居りましたから、儒先生に入門することは躊躇して父母にも請求しませんでした。幸ひに父が若き頃越高洲先生の門下に在りて、一通り儒學を心得て居らるゝことを承知して居りましたから、或夜竊に父に其志望を打明けまして、夜分人静まりて後少々宛父より四書を教へられました。

其中父は經典餘師と申す振假名付の書物を買ひ與へて呉れまして、是にて勉強する方が他人にも知られなくて、宜しかるべしと申されましたが、其時に父が餘り満腹すると、物覚えが悪くなると云ふことを告げられましたので、私は書物が覺えたさに、十三歳以後は食事を腹八分に止めることを定規としまして、爾來今日迄乳兒のある時以外は屹度これを守つて参りました。これが私の長壽を得ました第一原因かと思つて居ります。

憶出の貧困時代

私の生れました家庭は可なり資産には恵まれた方でありまして、婚嫁致しました棚橋家も當時は舅が二本松藩の囑託留守居役として四百石餘は食んで居ましたから、夫の爲に書物を読み、詩文の代筆する位の外は、何の用事もなき状態でありました。萬延でしたか文久でしたか確と記憶しませんが、舅が強て浪人致し夫と共に其郷里美濃に歸りまして、寺小屋式の家塾を開きましたり、特に夫の二弟が維新前の浪人仲間に入り、家政の事を打捨

て、浪人の食客などを養ふことになりましたは、家運の傾敗を免れず、所謂薪水井臼で薪もきります、水も汲みます、或時は米つきもやりますと云ふ状態に陥りますし、慶應三年舅の縁邊を頼り尾州一の宮に移住し、それ迄所持したる衣服調度を賣却して漸く數十金を得、寺小屋を開く傍ら人の爲に裁縫して、其賃銀を得たり、甚だしきは下駄を一六の市にひさぎて其利潤を收むる等の事に千辛萬苦を嘗めて貧家を支へました。

尤も明治二年より三年に掛け、一ヶ年程は、荻安賀と云ふ村の富豪に招かれて、夫と共に自進館と云ふ塾を開き稍小康を得、明治五年名古屋の小學校に奉職する身となり、引續き伊澤修二さんや吉川泰次郎さんの御蔭で、東京女子師範校に招聘せられ、其後福澤諭吉先生や早矢仕有的さん、廣瀬青柳先生の御好意で、學習院女子部其他に奉仕する身となりましたからは、一時の困難は稍過去の夢となりましたけれど、悴の大學卒業迄は雪の日も雨の日も芝の三田から、神田錦町の學習院迄徒歩で通勤致しました程で、猶ほ努力は絶えませんでした。是が私の老健を保ちました第一の原因であらうかと思つて居ります。

無益の心配をせぬ

私の夫棚橋松郎と申した人は、廿五歳で失明しました程學問好でありまして、儒學は勿論、佛學にも一通りの造詣のあつた人で、天命説を確認し、所謂安心立命に終始しました。従つて、私が勤勉勞苦しましても、生活意の如くならず憂鬱に陥る様な事がありますと、何時も人は、精一杯の努力を積んで猶酬ひられず、萬一饑餓に瀕することあるも、其れは天命にして人力の如何ともし難き所なれば、無益の憂苦に心を勞する勿れ、一女性の働きとしては、汝の努力は尋常人の企て及ぶ所にあらず、斯の如くして猶支へ難き場合は當に餓死あるのみ、復何の憂苦する所かあらんと、泰然自若として、私を戒めてくれました。

私が如何なる場合にも、克く工夫を凝らし、克く努力を致します、常習を有ちながら、事の成否に支配せられて苦勞の心を起さず、所謂心配せずの習慣を養成しましたのは、全

くこの夫の爲でありまして、唯今でも一切無益の心配を致しませぬ此の心の養ひが、私の長壽を得たる第三の原因であらうかと思つて居ります。

利 用 更 生

今一つ、今日科學の進歩せる時世に在つては、多數人の御笑ひを受けるかも知れませんが、私は固く之を信じて居りますから、皆様の清聴を煩はし度いと思ひます。

水野南北と申す易者がありまして、今でも其著書修身實驗録と云ふのが傳はつて居りますが、其中に紙と水とは人間に一日も缺くべからざる大切の者であつて、而も粗末に取扱はれ易き者なるが、之を粗末に心得る様な人は、決して長壽を得る者でないと云ふこと、天は生々化育を好み、死滅を喜ばざる者であるから、生物でも、死物でも、物の壽命を短める人は、夫れだけ自分の壽命を短くすること疑ひなしと云ふこと、人間でも、物品でも、大凡天の與へたる自然の壽命を所有する者で、その養ひに要する所の食料乃至肥料も

各々天賦の局限があるから、これを約やかにして、所謂食ひ延べをする者は、長壽を保ち、これを暴殄する者即ち、無益に遣ひ棄てる者、語を換へて言へば、暴飲暴食乃至身體を粗末にする者は、自然短命に終る者なりと云ふ事を懇切に説示してあります。

私は壯年の頃より、此教を守りまして、暴飲暴食などは勿論のこと、物の壽命を完うせしめて、苟くも無益に終らしめぬ様と心掛け、老いて衣食に事缺かぬ様になりましたから、人様に笑はれた事などありませんが、廢物利用に熱中し、一旦使用せられたる紙片を以て、扇面形乃至短冊形を造り、それに詠歌や壽の字を認めたり、封筒を裏返し、既に反古となりたる紙片を裏張にして普通用の封袋としたり、細かき屑紙を貼り合せて、四角乃至長方形となし、これを枕紙其他に使用したりして楽しんで居ります。

斯く物の壽命を延長させることが、私自身に報ひ來て此迄生きたのであらうかと思はれます。是が私の長壽を得たる第四の原因かと存じて居ります。

長壽の秘訣

人様に御目に懸りますと、貴姫は長命の家に生れたかと御尋ねになりますが、私の記憶せる範圍に於ては、繼祖母に當る人が、唯一人七十を超えられたかと思ひますが、祖父母も、皆五六十で歿し、特に兄弟姉妹七人の内四十歳を越えたるは私の外に一人あるのみで、悉く若死して居ります。

又時々、餘程健康に生れた者であらうと申さる、御方もありますが、私は月足らずで生れまして、幼少の頃は父母が其生長すら疑はしく思はれた位で、何れかと申せば虚弱の方で結婚後六年にして漸く一子を擧げた程でありました。其れ故私は今日の壽命は、全く上に擧げました、四ヶ條にあると自信して居ります。

猶蛇足を添へますれば、以上四ヶ條の中でも私の最も長壽の根元と確信して居りまするは、第三、第四の二ヶ條即ち、無益の心配をせぬこと、及び利用更生に努むることの二つで

ありまして、無益の心勞、無駄な心配は、徒に心身の疲態を増すばかりで、何の益もなさず、又天が折角人間のために産出したる物質を、粗末にして、其天壽を奪ふと申すことは、人間自體の生命を奪ふにも齊しく、如何にしても長壽の途とは思はれませぬ次第であります。何卒皆様も、老人の世迷言と思召されず、此點に御留意下さるゝ様祈り上げます。

廢物利用と冗費節約

(このお話は、昭和十三年一月七日棚橋先生が、東京中央放送局から、全國に放送された時の原稿であります。百歳の身をもつて、國家を思はれる熱誠からあふれ出るお言葉は、まことに私達のよく／＼考へればならぬことばかりです。深く／＼お味ひ下さい)

續く非常時

私は本年百歳になつた老婆であります。長命をいたしましたお蔭で、昨年以來御祝詞や

御祝品を澤山に戴き、大福々に新年を迎へました。

めでたしやきのふ白壽を祝はれてけふもとせの春にあふ身は

と詠じましたが、皆様も本年の御正月は、別して芽出度くお祝ひになつたことゝ存じます。

蒋介石が過去十餘年に亘り、訓練に訓練を重ねた支那の軍隊や防備に防備を加へた要塞を向ふに廻して、一年はさておき、僅々六ヶ月以内に北京、南京を始め、支那新舊の都を屠り、八省にまたがる地方を攻略し、皇軍の威武が大に騰つたことは、豊太閤の嘗て希望せられたる所で、而もこれを遂げられざりし所でありました。全く前古未曾有の出来事でありますから、芽出度きが上にも、芽出度き新年として、本年もお祝ひになつたことは、私

が疑を容れぬ所であります。

さりながら、皆さん、非常時の非常時たることは、昨年も今年も相變らずであります。

或は明年も亦同様であるかも知れません。お互に一層心を締めてかゝらねばならぬことゝ

思ひます。

勿論私のお察しする所では、御國の富は日露戦役の頃とは非常の相違で、今日はその幾倍だか知れませんが。従つて今日の非常時の負擔の如き、何處の果てまでも、不平の聲など聞きたくも聞えませんが、この戦禍のため、貿易が不振になつたり、或は入超が増大したりしますれば、何時までも同様に参りませんことは、覺悟して居らねばなりません。

若しさうした事になりますれば、これを凌ぐには、私が若い頃貧乏を極めました時に思ひ付きました、その貧苦に打勝つて以來今日に至るまで、絶えず實行して居りますことを皆様に實行して戴く外ありませんと存じます。それは何かと申しますと、廢物を利用することゝ、浪費を省くといふことの二つであります。

廢物利用と冗費節約

廢物を利用するといふことは、私が毎度人様から

「何故左様に長生したか」

とお尋ねを載きます時、お答へしますことですが、水野南北といふ易の先生が世に在る物品は何物にもせよ、定まりたる壽命のある者であるからその壽命を完全に保たしめるやう注意せねばならぬ。その壽命を短かめる者、即ち天物を暴殄する人は、知らず識らず自分の生命を短かめることとなつて、永生は出来ぬものである、と修身實驗録に説き示された教を守り、浸りに廢物を造らず、如何様にもして、これを利用したのが、確かに、私の長命の一因であります。御國に於てもその通りで、國民が擧つて、廢物の利用に心掛けましたなら、國の壽命が自然に延びゆくことは疑ふ餘地のない所であります。

少しく異なる様であります、今、これを貨幣に換算して見ますと、我國九千萬の人が、この廢物利用によつて、一日一錢を剩し得たとして見ますれば、一年には三億二千八百五十萬圓となり、約五分の一の人が、一日一錢と見ましても、六千五百七十萬圓となり、戦費中の輸送費ぐらゐは支辨が出来ようかと思はれますし、更に浪費を省くと申す點を考へま

すと、我國民に獨佛などの國民と比較して、浪費者の多いと申すことは、争はれぬ事實であります、交際の浪費などは、最も甚だしいものがあります。

幾分か富豪仲間には、衣服に飲食に随分浪費を敢てせらるゝ方が少からず有るやうに考へられます。勿論國各々習慣と申すものがあり、浪費といふ中にも、よんどころなき物もありますから、一がいこれをしりぞけて仕舞ふことは出来ないものもあります、極めて内輪に見積りまして、全國百萬人の浪費者ありと致しまして、その方々に一日十錢宛浪費を省いて頂きますと、金額は正に三千六百五十萬圓となり、これ亦軍費に多大の影響を及ぼすことゝ存じます。

か様な次第でありますから、支那が、いよいよ、長期抗日を決定して、ソビエト・ロシアや英國などの援助を頼みとする様なものになりますれば、我國民も、十分なる覺悟を定め、その一助として私が以上陳べました事に精進して戴きたいと思ひます。

老婆の世迷事と思し召さないで、くれぐれもお願ひ致します。

容色の美醜よりも誠の心で

顔よりも心

男女ともに同じことではありますが、あなた方は結婚なさる時、何を目標に、何處を望んで相手をお選びになりますか。若しかして、姿、形、顔の良し悪しを見て、相手を定めるとすれば、これほど危険なことはありません。

中には心もよく、容色のすぐれた方もありませうが、それよりも容色の美醜よりも、心の出来た方、修養の積めた人を求むべきであります。

ともすると、美しい人を愛し求める傾きがあります。結婚早々はお互ひにあらをかくしてよそ行きの態度でをりますので、平穩ですが、時日がたつにつれ、心の至らない點が顔

を出し、夫婦喧嘩が始まり、兄弟親戚の間はうまくゆきません。さうしてやつと

「あゝこれは顔よりも心が大事だったな」と氣付くのです。

一家の中では夫婦の間が大切です。夫婦中がよければ、自然と家の中が圓くゆき、従つて父母にも孝養をつくすことが出来るのです。夫婦喧嘩をし、いつも風波が絶えないやうなことでは、父母に孝養などは出来やう筈はありません。こゝに外見だけの容色だけでは駄目だといふことが、はつきりとして來るのです。こゝに面白い話があります。

忍耐の勝利

昔、車力の權八といふものがありました。妻をめとり、初めのほどは、仲睦まじく暮してをりましたが、生活が少しく楽になりますと慎みがぬけ、夫も妻も餘りになれすぎて、妻は夫に言葉を返すやうになり、そこから夫婦のいさかひが起つて來るものです。

所が權八の女房はさうではありません。至つて正直で柔和で、そして堪忍強い女でした。權八はそろ／＼道楽を初め、悪遊びをしだし、つれそふ女房がいやになつて來ました。一たん嫌となると、何でも彼でも女房のすることが氣に入らず、遂には滅多に家にはよりつかぬやうになりました。

妻は少しも怒らず、たま／＼夫が家に歸つて來れば、出来るだけの機嫌をとつては夫に仕へました。機嫌を取られれば取られるほどいやになるのが男の常、どうかして嫌な女房を放り出したといふ了見を起したのです。

併しいくら叱り飛ばし、無理を言つて、勝手なことをしても、未だかつて怒つたことがありません。何か難癖をつけて追ひ出してやらうとしても、何一つ落度はありません。

權八の女房は、ごく器量の悪い女ですが、ニコ／＼した顔はまるで福の神です。

「これは一つ女房の器量の悪いのを悪口をいつて、怒らしてやらう、女といふ者は自分の姿の悪口をいはれると腹を立てるものだから」

と思つて權八、女房の色黒い顔、低い鼻、石臼のやうな大きなお尻、さうだこれを歌に詠んで、女房の悪口をいへば、さすが堪忍強い女房も腹を立てるであらう、若し腹を立てたら、それを言ひが／＼りにして離縁してやらうと考へたのです。

「コレ女房ちよつとこゝへこい。おれはお前の顔を見てゐると胸が悪くなる、そこで歌を一つよんだ」

「あれ、まあ、お恥かしいことで……私を歌に詠んで下さるなんて有難うございます」

「いや有難い歌ではない、マア聞いてから禮をいへ」と次の如く詠んだのです。

やきもちはやかねど顔はくすぼりて鼻はひしやけて尻はぼつてり

といつて女房の顔を見るとやつぱりニコ／＼

「お恥かしいございます」

とうつむいて居るばかりで腹をたてませぬ。案に相違した權八

「コレ／＼女房、歌を詠ませて、お恥かしいぢや濟まぬ。何でも返歌しろ、返歌せぬと叩

き出すぞ」

「それでも私は歌といふものを詠んだことがありません」と涙を流して詫び入るのです。「何？ 詠めぬなら出て行け、居りたくば返歌しろ、さあ詠め〜」権八は思ふ壺だとはかり責めたてました。

「ではせめて、一時間ばかりお許し下さいませ」

と女房はしばらく考へてをりましたが、眞實から出るものは、恐ろしいものです。やがて詠んだのが次の歌です。権八は定めし腹の立つた歌だらうと思つたのに

ありがたや姿笑うて心をばゆるし給はる君がなさけは

歌の心は「あなたは姿のことばかりを悪くおつしやつて姿の様に醜く至らぬ私の心はおつしやらずに許して下さいました。夫の情が身にしみて有難うございました」といふのです。

これにはさすがの権八も感心してしまつて、たうとう心を入れかへて、女房と心を合せて

せつせと働きましたので、一家は圓滿、長者になつたといひます。

夫婦相和

これはほんのお話にすぎませんが、権八の如き男、又権八の如き妻があつて角突き合してゐる家庭がありませう。権八の女房の如き女性を妻にしながらも、尊い心の中を見抜くことが出来ず、妻をいぢめてゐる夫もあるでせう。こゝは一つお互ひに考へるべきではないでせうか。

恐れ多くも教育勸語の中にも「夫婦相和」といしましめられてございます。夫婦の和ほど世に尊いものはありません。論語の中にも「賢ヲ賢トシテ色ニ易ヘ」とございます。妻を娶るには容色の美醜を問はず、そんなことよりも心のまつすぐな、修養の出来た賢女を娶るのが大事といふ意味であります。

ともすると今時の男性も女性も外見の美にばかりとらはれて、精神、情操といふことを

軽く考へる傾向があります。そのやうな心得違ひのないやうに切望いたします。

私の望みたいこと

女子の虚栄心

女子の缺點は虚栄の結晶で、虚栄心は女子の大敵といはれてをります。

うなづかれる言葉ではありませんか。

すべて自分の身分相應にしてゐれば、間違ひはないのでありますが、女子はとかく自分の境遇、財産、衣服といったものを、實際より以上に、人にみられたいといふ氣持が動いてゐます。

もつとも、人からなるべく良く見られたい、實際以上に他から認めてもらひたいといふ

氣持は、人間誰しも持つてゐるもので、あながち女子のみを責めるわけにはいかないのでありますが、女子の虚栄心はこれにもなふ弊害が多く、自ら墓穴を掘り、大きくは親兄弟、夫、子供にまで、迷惑を及ぼすことが多いのであります。

自ら、ことを起して、獨立獨行の働きもないのに、人のすることを、あゝもしてみたい、かうもしてみたいとうらやむ。

人が立派な家を建築すれば自分もあんな家にすみたい、人が美しい流行衣裳を身につければ、自分もあのやうに着飾つてみたい、とうらやむ。うらやむだけならよいが、どうかすると無理算段して、身分不相應な流行着を買ひこんで得々と着歩いてゐる。

一たん假面をかぶると容易に脱げず、人を招いても、お金もないのに山海の珍味を並べて御馳走し、住宅、家具に見栄をはる……といふ風にたえずあくせくと、少しでもよく見えるやうにと氣を揉む、かういつた風に常に人の批評を氣にし、他人のすることをみて、行動するといふことになつてくると、自分の生活はたゞ虚栄のために動いてゐるだけで、そこ

に何の價値もなければ、向上も、進歩も見出されません。

女子は男子の如く、自分の力によつて獨立獨行するのではなく、親兄弟、夫の財力によつてこれらの見榮をはり、富貴を装ひ、浮華の慾望をみたし、虚榮心を満足させるので、自然多くの無理を生み、手もとで虚榮の心がみだされなくなつてくると、教育ある女子ですら物事の判断がつかなくなつて、常軌を逸し、萬引の罪を犯すといふやうなことになるのであります。まことに虚榮心は、自分自身を、煩悶の淵へおとしこむばかりでなく、親兄弟に迷惑をかける、厄介な結果となるのであります。

風雨に耐へよ

もう一つ私が望みたいことは、女子は將來一家の主婦となつて家庭をきり廻す重大な責任をもつてゐるのでありますから、もつとも堅實な、搖ぎなき思想を養はねばならぬことであります。

丁度物に例へるならば、風を避けて育つた樹木は、材木にして脆いものであります。強い陽を浴び、強風に暴かれて育つた樹木は、堅固であります。温室で慈くしまれて育つた草花は壽命が脆く、大地に生えて、自然に苛なまれた草花は、發育が堅實である如く、人間にも、堅忍不拔の底力が必要であります。

堅實な家庭の集合から大きな國家が成立してゐるのでありますから、華美輕薄のものには到底この大役は負はせられないのであります。第一、温室咲きでは堪へ得ることの方が難しいかもしれません。各方面から心身を鍊磨して、世の中の雨風に堪へ得る人間となることを、切に希望してやまないであります。

風に從へ

最後に、職業にたづさはつてゐる方々に、申し上げたいのであります。職業婦人にも、勿論前に述べた、心身の鍊磨は最も必要であります。

心の鍊磨と申すと、意志が堅固で、周囲の事情にオイソレと動かされぬ修業であります。ところがこれは往々やり方によつて、人は人、自分は自分といふ風に自分一人よがりとなり、周囲との調和をかく場合がないでもありません。大勢の中に交つて日を送る人は、周囲の人々との調和がまづ何よりも大切であります。一寸した努力が足らぬばかりで、人の感情を害することは、まことにつまらないことでもあります。

ところが人は人、自分は自分といふことになると、案外相手の感情を損ねる場合が多いのであります。といつてことごとくに人と共にウカ／＼としてゐるでは、心がけた心の修養を怠ることとなり、自分自身が不愉快になつてまゐります。

大體これ／＼しようと思ひきめた決心はまことに鈍りやすいもので、こんな場合意志の薄弱である人は、周囲にこだはつてゐるために、折角あらためながらも、脆くも決心が元へもどり、また缺點のある自分に、かへりやすいものであります。

古人は

根をしめて風に従ふ柳かな

と詠みましたが、これはまことに良い句だと思ひます。特に職業についてゐる方々には千金に價する貴い教へであります。

この柳のごとく、強く優しい心の持主になることを私は望んでをります。

死をいとはぬ孝心を持つて

お互ひの幸福を

外來思想の影響とでも申すのでせうか、どうも若い人々の心が、自分さへ良ければ良い、自分だけが幸福なれば、これまでに育てくれた親の恩などどうでもよいといふ氣持を持

つた人がかなりあるやうです。

こんな考へは、日本の美しい家族制度を破壊する恐るべき個人主義の影響であります。先年（昭和十一年の末）女子大學まで出して貰つた大恩ある父親の神主が、不仕末をしたので、上の姉妹が父を追ひ出し、それを苦しめた末の妹が自殺したりしても見向きもしない姉妹の事が新聞に出て居りました。そんな悲しい事件が出て居りますと、その度に私は心を痛めてをります。

然しながら又他には、これとは反對の美しい話も出て居りますので、やつと救はれる氣持も致します。古い格言ではありますが、

「親は親たらずとも子は子たるべし」

といふのがあります。この格言にあてはまる昔の話がありますので述べませう。

おもとの孝心

昔奈良の猿澤のほとりに市之進といふ者がありました。妻は女兒おもとが五歳の時に亡くなりましたので、男と女の子をつれた後妻を買ひました。併し父の市之進もおもとが九歳の時に亡くなつてしまひました。

後妻はまゝ、しい仲のおもとを事毎に悪み、連子には厚着をさせても、おもとには單衣を着せるとか、食事をも、ろくに與へず、打つ蹴るの折檻をしますが、おもとは少しもそれを恨みません。子たるの道をつくして、能く仕へました。そして二人の連子を心から可愛がつてやりました。ですから連子は母の悪心にはならず、おもとを見習ひ、大切にしてをりました。

ところがまゝ母は、おもとが反抗もせず、まめ／＼しく仕へるのが氣に入らず、或る夏のことでした。湯をぐらく／＼に沸し、これを鹽に入れ、おもとに

「さあ、早くお湯のさめぬうちに生水せよ」

ときびしく申しつけました。おもとは魂も消えるばかり驚きましたが、母の言ひつけに

そむいては不幸と思つて、我が命もこれまでと覺悟して、

「はい、ではお先に頂きます」

と着物をぬいで煮湯の中に入らうとすると、今年十一になつた弟が、桶に水を入れて持つて来て盥にあけ、

「姉様、私が入ります」

といつて飛びこみました。驚いて母が抱き上げましたが、大火傷して、二ヶ月ばかり床につきました。母の憎しみはますます／＼つのもり、或る時のこと、あつい酒を茶碗に入れ、一服の薬を差し出し、

「おもと、これは顔の美しくなる薬ですよ」

といつて服ませようとした。おもとはその薬が何んであるかは知つてゐましたが、押し頂いで吞まうとしますと、九歳の妹が姉の茶碗をひつたくり、

「綺麗になる薬なら、私が頂きます」

と言つて服まうとしますと、母は驚いてその茶碗をつきとばしてしまひました。

こんなになされても、おもとは少しも憾みません。或る夏、母が命も危い大病で床につきました。おもとは猿澤のほとりの観音様に毎日お詣りして、

「私の命を取り、お母様をお助け下さい」

とお願ひしました。この願が通じてか、母の病氣も全快しましたので、おもとは大變に喜んだのであります。そこで或る夏の日、

「お母様、これも観音様のおかげです。お禮詣りに行きたいと思ひますが」

と申しますと、母はニヤリと笑つて、

「それは良い事ぢや、歸り道にお池へはまつてはなりませんぞ、尤も池へはまつて死んだら、この母は嬉しい、それが誠の孝行ぢや」

と、それとなく早く死ねよといはぬばかりです。おもとは観音様にお詣りしての歸り道つく／＼我が身の不運をなげきました。

「池にはまつて死んだなら、過つて死んだことになるので、お母様には迷惑はかゝるまい、なるほどお母様も喜んで下さるだらう」

と、手を合せ、かげながら母と弟と妹に別れをつけ、すでに飛びこまうとしますと、どうして知つたのか弟と妹が走つて来て、

「お姉様が死ぬなら私も死ぬ、お姉様待つて頂戴、寝てゐたら夢の中に観音様が來られて姉様が危い、早く行つて助けよとお告げがありました。それで裸足で駈けて來ました」

「あゝ、それほどまでに、この姉を大切に思うてくれるのか、だが死なねばならぬ譯があるのですから、お前達は、私が死んだらお母様に孝行して下さいよ」

と歸さうとしますが、弟妹は姉の袖をつかまへて離しません。その所へ様子やいかにとそつと來た母は、この姉妹の美しい有様を見て、はつとし、そこへまろび出て、

「あゝ悪かつたく、おもとや許して、この母は、お前に母らしいことは何もせず、かへつて殺さうとまでした。それなのに、お前は私をこんなに大切に思つてくれます。私は恥

かしい。許して下さい」

と、おもと等三人を抱きしめ、わつとばかりに泣き入り、自分の非行を詫びました。

親和の修養

これはお話ですが、味ふべき澤山の教訓を含んでゐるではありませんか。

この美しい感情を、現代の人の何人が持つて居りませうか。孝行の爲には死をもいとほぬ精神、と申しては少し極端かも知りませんが、それだけの心掛を持つて居れば、そして又皆さんが親となつた時、子供の心をいたわつて行けば、この世の中の悲しい出來事も無くなることゝ思ひます。

それには何んといつても心の修養が第一です。お互がたえず修養して行けば、そこに教へずとも、語らずとも、親と子の親和は生れて來るであります。

孝は百行の基

父母に孝に

世の中に、親子兄弟、夫婦の間が圓滿に行つてゐるくらゐ美しいものはありません。親は子をかばひ、子は養育の恩を忘れず親に仕へ、兄弟は仲よく相扶け、夫婦は相むつんで一家を守る。これは我が日本の誇るべき美點であります。

所がどうも近頃はさうでない人があるので甚だ残念でたまりません。子供達は自分一人で大きくなつたやうに思つて、親の恩を考へて見ようともしません。結婚すると夫婦だけの生活を考へ、親達がどんなに迷惑しようと、てんで考へても見ません。かういふ考への人、世にはびこつたならどうなるでせう。

「孝は百行の基」

と申すほどです。親孝行の觀念のないものに、何んとして忠君愛國の精神を求めることが出来ませう。支那の曹子といふ方は、老ひたる親に仕へることを、次のやうに申されてゐます。

「孝子の老人を養ふや、その心を樂しませ、その志に違はず、その耳目を樂しましめ、その寢處を安んじ、その飲食を以てこれを忠養す。この故に父母愛する所は亦これを愛し父母敬する所は亦これを敬し、犬馬の如きも父母の愛せられたものは粗末にすべからず、まして父母が愛敬された人々に於ては……」

まことに味はふべき言葉です。

「孝行をしたい時には親はなし」

孝行は何時からでも出来ると思はないで、すぐ直にして頂きたいのです。これについて面白い話があります。

親を買ふ

昔「親賣らう」といつて親を賣り歩く者がありました。併し誰一人買はうといふ者
がありません。ないはずで。皆んな親を持つて退屈し、その餘り

「うちの親父さんも、もう極樂參りをされるころぢやが」

といつて親を持って餘してゐるのですもの。

所がこゝに兩親のない夫婦者がありまして親を賣り歩く聲を聞いて、

「何んといふお氣の毒なことだらう。賣られる親御達が不合せか、息子殿が不孝なのか、
或は又たよる子供がない爲か。何んにしてもお氣の毒なことぢや。私達は小さい時に兩親
に別れたので、一向親の味を知らない。産の御恩を報ずることも出来ないのが悲しいのう、
何んと人の親でもいゝから我が親にして、朝夕つかへ、心一ぱい御介抱したら、少しは
産の親達への御恩報じにもならう。あの御老人を買うて、御介抱して見ようではないか」

と夫婦の相談がまとまり、表に出て取引を始めました。

「親買ひませう、どれ、見せて下さい」

「ハイ、代物は家にございます。父親は當年六十八歳、母親は六十三歳、随分達者で
代物は宜しうございます」

「して値段はいかほどで」

「ハイ夫婦で百兩」

「何、百兩、それは高い、私達は世帯を持つてまだ間がない、もちつとまからんかな」

「いえ、現金かけ値なし、一兩もまからないのです」

かうして相方かけ合ひの末、八十兩で相談がまとまりました。

「では代物を見せなされ」

「左様ならば、明日どこそまでお出で下さい、私が迎へに出ませうほどに」
と約束し、翌日金をつくつて夫婦で出かけました。

「さあ、かうおいでなされ」

といつて、昨日の人が親の家に案内してくれました。来て見れば思ひがけない立派な門構へです。はてこれは變だなと思ひながら、座敷に通つて見ますと、なか／＼結構な座敷です。そのうちにお茶、煙草が出、お菓子を盆に山のやうに盛つて出し、大變なもてなし方です。

しばらくすると老人夫婦が出て来て、

「この老ひぼれ夫婦をよう買うて下された。随分可愛がつて下され、頼みます。私達夫婦は年老ひてあとを相續する子供がなく、難儀に思つて居りました。よう買うて下された。かたじけなうござる。」

幸ひ田地も少々あり、お金もございます。この家屋敷も私のもの、眞實誠心のある養子がほしさに賣りに出しましたを、よう買うて下されたのう。かうして親子となるからには今日からみんなあなたの物ぢや、よいやうにして下され」

と大變な喜びやうです。若夫婦はこれを聞いてびつくりしました。

これはせめて人の親なりと迎へて、親の恩を知りたいといふ眞實誠心が天に通じ、天より授けられた運であつたのです。

若夫婦は産の親にも勝る孝養をつくし、次第に榮えたといふ話です。

總て修養がもと

親が亡くなつてから、どんなに立派なお葬式をし、墓石に蒲團を着せても、もう遅いのです。兩親存命中に、誠心をつくして孝養はしたいものです。

孝行をするといふ氣持は、すべての場合に影響します。かうしては親に心配をかけると思へば、自然と自分の行ひを慎むことになり、この氣持は又あなた方の子供の教育の上にもひゞいて参り、しらす／＼良い感化を及ぼすものです。

それにつけても、積まねばならぬのは修養の道です。しつかりとした修養が出来て居れ

ば、行はねばならぬ孝道を踏み外す心配はありません。
孝養をつくすことは要するにお國に對しての忠義ともなるのです。こゝの所を皆さんが
しつかり心の中にしまつておいて頂きたいのです。

附録・棚橋絢子刀自隨感錄終

昭和十三年二月十六日印刷
昭和十三年二月二十日發行

定價金 一圓

著者 棚橋 絢子

東京市麹町區九段四丁目十三番地

發行者 都 河 龍

東京市神田區神保町三丁目二九

印刷所 山縣製印刷株式會社

不許複製
評釋女大學

發行所

東京市麹町區
九段四丁目十三番地

婦女界社

振替東京二九三七番
電話九段四一七一三番

千葉春村著

(七版)

偉人の母

四六判函入美本
定價一圓廿錢(送料)

▲偉人なる最大の原因は幼時に於ける母の感化であります。母がね種は生へません。
▲どういふ教育をすれば、偉人になれるか、本書はこの問題を即決する活きた教科書であります。

- ◇後藤伯爵の母
- ◇東郷元帥の母
- ◇金子伯爾の母
- ◇森 蘭外の母
- ◇原 敬の母
- ◇桂 公爵の母
- ◇乃木將軍の母
- ◇伊藤公爵の母
- ◇吉田松陰の母
- ◇佐久間象山の母
- ◇中江藤樹の母
- ◇賴山陽の母
- ◇孟子の母
- ◇ナポレオンの母
- ◇文藝ゲーテの母
- ◇カーネギーの母
- ◇ワシントンの母
- ◇シルレルの母

醫學博士

吉田久造著

病兒看護の批判

定價一圓廿錢(送料)

子供の病氣はぐんぐん進むものです。一寸でも手遅れになると取返しがつきません。先づ病氣を見出すことが一番大切です。次に醫者の手當の行届くやう、上手に看護することが肝要です。豫防、看護の要領を實例批判して詳述した病兒看護法の虎の巻です。是非皆様の御家庭に御常備下さい。

發行所
東京市東區九段上
婦女界社

婦人小學訓 修養小學訓

好評第十版發賣
四六判一五〇頁、本文
總ルビつき、簡素紙裝美本
定價六十錢(送料)

「小學訓」は古今に稀な人生修養の名訓です。修身齋家治國平天下の本は實にこの小學にあるといはれます。非常時の女性必讀の良書です。

棚橋絢子先生著

棚橋先生は小學に分り易く字義、摘要、解釋、評論を附せられました。處女會、青年訓練所等の修身教科書として最適、非常時の折、どの家庭にも一本をお備へ下さい。

「目次の大要」

- ◇胎教
- ◇兒童教育
- ◇學問と人格
- ◇進
- ◇結
- ◇結婚の心得
- ◇人の三從七去
- ◇男女一生の修學心得
- ◇先生と弟子
- ◇父母につかへる
- ◇長上に対する心得
- ◇嫁と男
- ◇夫婦の道
- ◇祭神
- ◇孝道と不孝
- ◇君臣の道
- ◇祭神
- ◇男女の別
- ◇朋友の道
- ◇其他

婦女界社發行

五聖閣 熊崎健翁先生の名著

(四六判三百三十頁・ポプリン 装幀・上製箱入の豪華美本)

赤ちやんの名付け讀本

一生の運命を決する問題!

▲あなたの名は、あなたの一生の運命を決します。それは、實に恐ろしいことです。

▲あなたの赤ちやんには、必ず開運出世の出来る、良い名前をつけて上げて下さい。

▲本書は、姓名判断の決定版です。本書を讀むと讀まぬとで、一生の運命が決します。一生の幸運はまさに本書から得られます。

▲試みに本書を見て、あなたの知人の姓名判断をして御覧なさい。實に百發百中、恐ろしいほど良く當ります。

▲本書一冊あれば、命名も改名も思ひのまゝです。今すぐ本書によつて幸運を掴んで下さい。

主要目次

- ◇ 子寶に恵まれ幸福な人生を送るには……
- ◇ 開運の秘訣と機會は良名から
- ◇ 暗示誘導の力で運命は克服できる
- ◇ 姓名の吉凶判断と轉運法
- ◇ 最良の名を選ぶ秘訣公開
- ◇ 神祕なる姓名學の基礎數盤
- ◇ 熊崎式姓名學應用字曲數十頁以上七篇二百數十項目にわけ、實例として名士の姓名數十名を挙げ、その運命を一々興深く説いてあります。

定價一圓卅錢

送料内海 郵費別

發售社女婦 目丁四段九町雜京東 番七三九二京東替振

東洋大學 教授

關寬之先生著 忽ち五版!!

(四六判三三〇頁 布裝函入美本)

我子の教育

家庭教育の實際的指導書

▲お子様を立派に育てる秘訣一切が、學理にとらはれず、卑俗に流れず、實際的に説いてあります

▲これを讀んで感激せぬ親はなく、これによつて伸びぬ子供はありません。

▲本書によつて成績がぐつと上つた、悪い癖がすつかりなくなつたといふ感激の反響が本社宛に山のやうに殺到してをります。

▲女學校高等科、花嫁學校、全國母の會では無二の教材として本書を引張り風といふ盛況です。

定價一圓卅錢

(送料内海 郵費別)

近頃こんなに買れた本は珍しい、増刷又増刷目下第五版發賣中

目次の一部

- ◇ 子供の教育……
- ◇ 子供の心理……
- ◇ 子供の生活……
- ◇ 子供の遊び……
- ◇ 子供の言葉……
- ◇ 子供の習慣……
- ◇ 子供の健康……
- ◇ 子供の徳……
- ◇ 子供の知識……
- ◇ 子供の能力……
- ◇ 子供の個性……
- ◇ 子供の社会……
- ◇ 子供の職業……
- ◇ 子供の結婚……
- ◇ 子供の死……
- ◇ 子供の遺言……
- ◇ 子供の遺産……
- ◇ 子供の慈善……
- ◇ 子供の教育……
- ◇ 子供の訓練……
- ◇ 子供の指導……
- ◇ 子供の奨励……
- ◇ 子供の懲戒……
- ◇ 子供の模範……
- ◇ 子供の先例……
- ◇ 子供の後例……
- ◇ 子供の比較……
- ◇ 子供の対照……
- ◇ 子供の分析……
- ◇ 子供の綜合……
- ◇ 子供の應用……
- ◇ 子供の實踐……
- ◇ 子供の理論……
- ◇ 子供の經驗……
- ◇ 子供の直覺……
- ◇ 子供の直観……
- ◇ 子供の直悟……
- ◇ 子供の直達……
- ◇ 子供の直達……
- ◇ 子供の直達……

社女界 目丁四段九町雜京東 番七三九二京東替振

最新刊

出版 念記壽百先生子絢橋棚

傳記 棚橋絢子刀自

中村武羅夫先生著

四六判布裝箱入り
寫真版口繪數葉

定價 一圓廿錢

送料 十二錢

棚橋先生百歳の生涯は典型的な「日本婦人の姿」を最も如實に語るものです。銃後女性の必讀を!

棚橋絢子刀自は天保に生れ、弘化、嘉永、安政、文久、慶應、明治、大正、昭和と、動亂と建設の各時代を経て今日に及んでおられます。この間一人の女性として刀自は如何に歩んだかを全日本の女性に知って頂きたい

【目次の大要】

▼▼▼▼▼
牛尾田家の長女
學問への興味を始める
從兄の縁談を破る
結婚家の幸福から離る
結核の行方を探る
千石の勤め生活
薪十兩の金・居候
八十八の金・居候
一宮の金・居候
荻原の金・居候
下駄屋の金・居候

▼▼▼▼▼
幸運の珠を失ふ
初めて東京へ
女子師範学校を辭す
繼母と見られる
指導した名流婦人
金聲小學校創立閉鎖
癌の手術の高入院生活
九十日間の高入院生活
名古屋の間の高入院生活
肺尖カタルの療養へ
愛敬女學校校長となる
皇恩に浴して
長壽の秘訣

婦女界社發行

339
235

終

